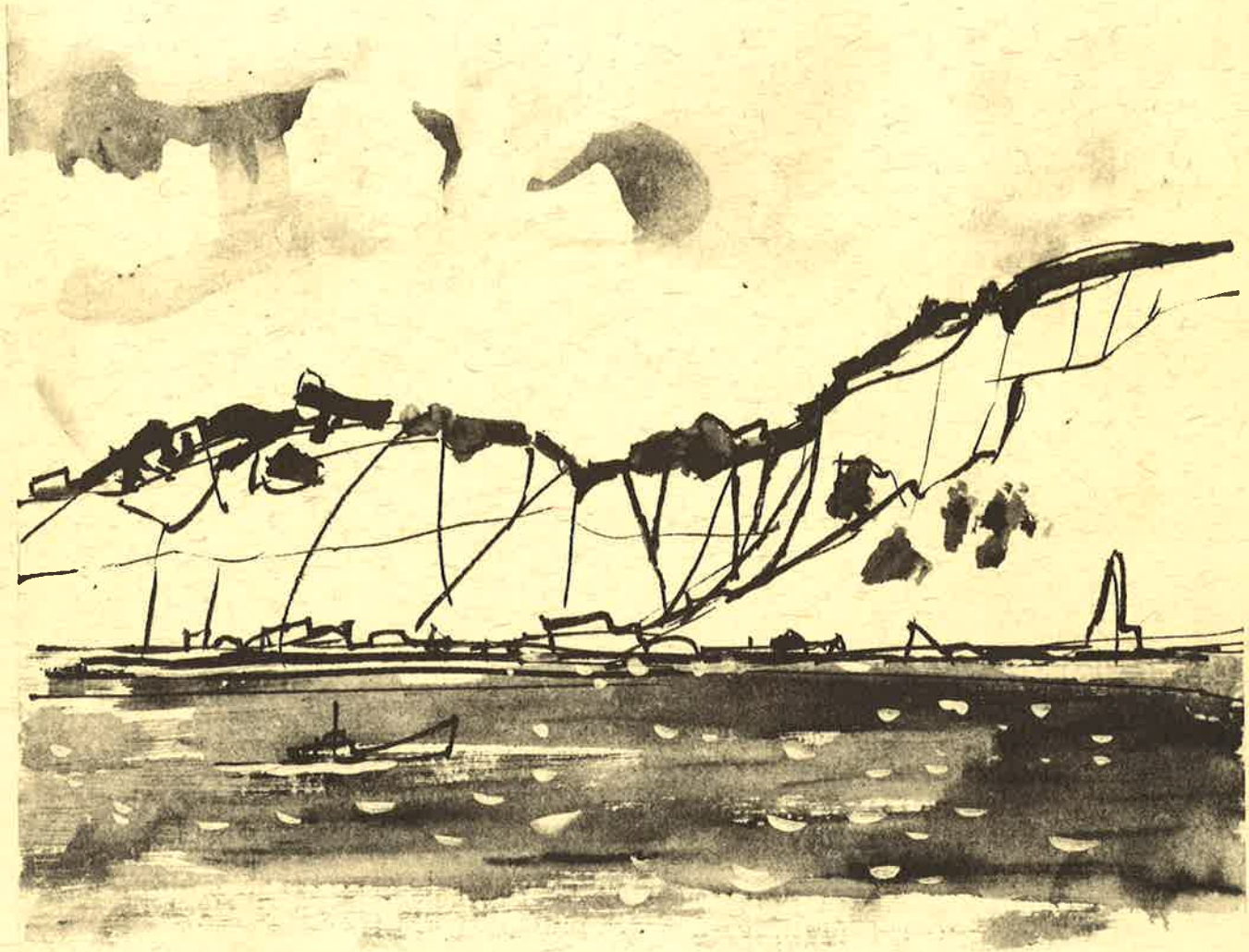
# 渡り鳥

第2号　1981



室蘭市医師親交会誌

# 渡り鳥

第２号　1981

室蘭市医師親交会誌

# 親交会誌 波久鳥 目次


巻頭言　波久鳥に想う　室蘭市医師会会長　原田　一洋……1

親交会記念アルバム……2

お元気ですか――旧友通信――……5

イタンキゴルフ場の思い出　青森市　佐藤　義臣

長田先生からの書簡

今井寅雄先生の消息

＝しのぶ草＝

佐藤雄三先生を偲ぶ……中村　秀……8

遺　句……（宮本素風・大久保東陽）……9

父東陽のこと……大久保洋平……10

故中村孝先生……東　栄……11

短歌・俳句……（皆川英貞・曽根清孝）……12……13

わが青春……北大柔道部　池田　満穂……14

隨想

スエーデンあれこれ……小国　親久……16

くたばれパリス……畠山　正照……18

妻・母・女……桜庭　シゲ……20

裸足になった女房……MO生……22

小股の切れ上った女……池田　洋二……23

甘　香……吉井　正仁……24

柘植先生の勲三等瑞宝章

敍勲をお祝して……斉藤　義寛……26

かなり古いお話（その一）……小　雲　水……28

旭川旅行記……31

バスの中……斉藤　修弥

ホテル宴会・二次会のこと……事務局　青木　茂

夜の旭川探訪……H・M

ゴルフ優勝の記……西島　毅

市内観光……狩野　正直

「優佳良織工芸館」を訪ねて……阿部　昭治

和風庭園「小城」……高島　信治

帰えりのバスで……畠山　正照

寸話

旨いもの……吉井　正仁……19

グループ紹介　三木会……村井　玄乙……23

いいたい放題……飯島　三男……40

編集後記……42


表紙（銀屏風）・題字　加藤治良

カット　竹内隆一、吉井正仁、加藤治良

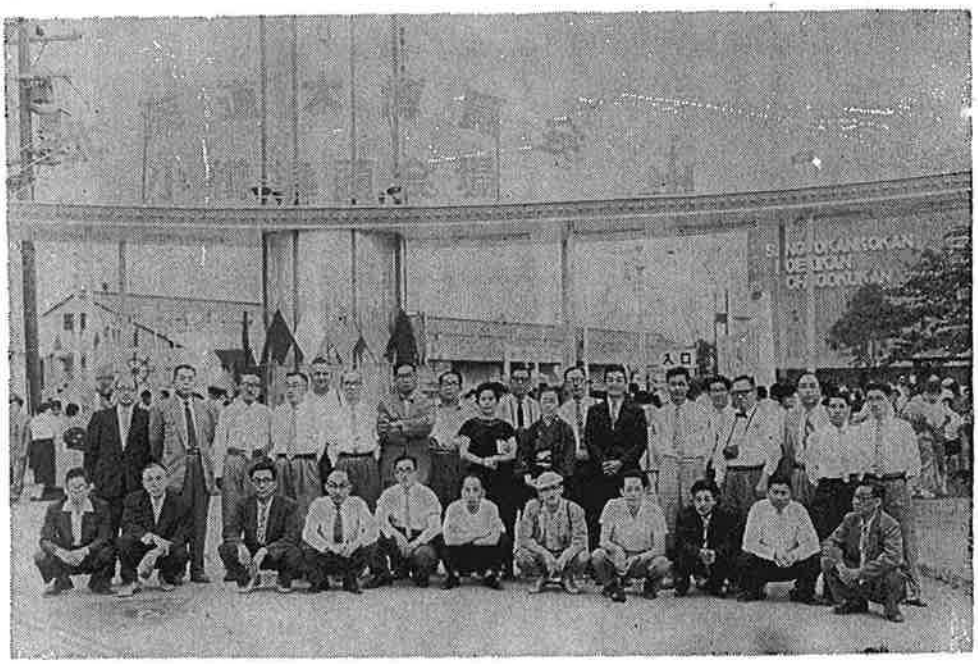
# 巻頭言　「波久鳥」に想う

室蘭市医師親交会会長　原田一洋

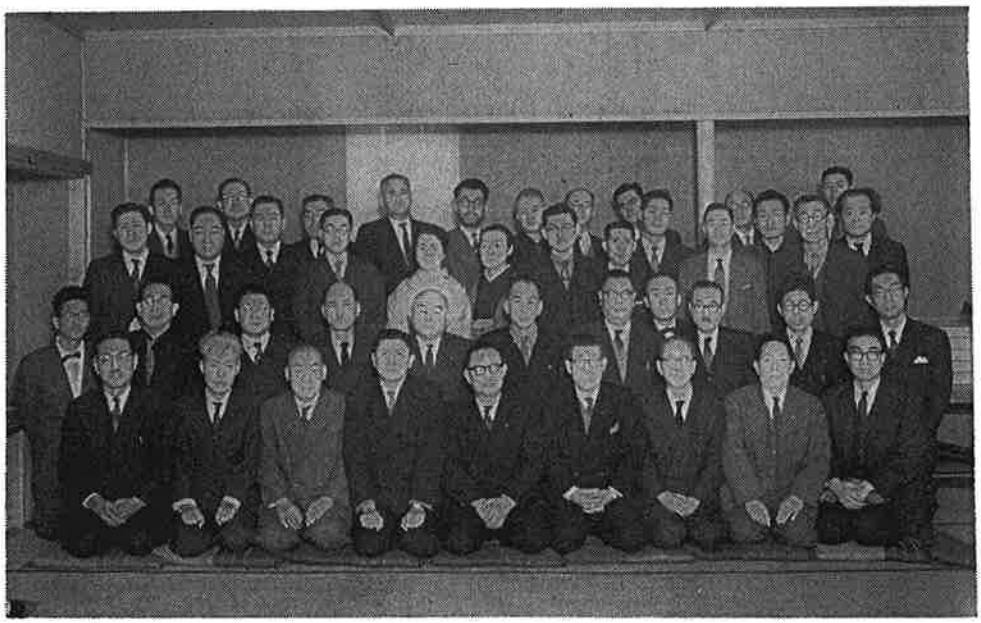
昨年創刊の親交会雑誌「波久鳥」は、編集担当の諸先生の御努力と、執筆の先生方の筆力と学識によって期待以上の出来ばえとなり、室蘭民報、北海道新聞等に大々的に取り上げられ、親交会内部の親睦の実を上げるとともに、対外的に大きな広報の意味をも持つ事を改めて知らされた次第であります。

本年発行の第二号が、益々内容を充実させ創刊号以上の読みごたえのあるものとなる事を信じておりますが、時あたかも、室蘭市医師会の永年に亘る懸案であった、室蘭・登別保健センターのプランが、いよいよ実行に移されようとする時に当たり、会の結束を固め、言うべき事をキッチリ述べる場としても、「波久鳥」が益々前進する事を心から切望いたします。

# 親交会記念アルバム




昭和33年７月20日　北海道博覧会見学記念　（小樽）



昭和33年12月13日　1,000万達成記念　（粋月）

昭和35年９月17日　クッタラ湖にて

# お元気ですか

旧友通信

## イタンキゴルフ場の思い出

（青森）　佐藤義臣

思えば五十年の昔になる。私が昭和五年輪西の元町診療所に赴任してから、昭和三十年新日鉄病院を退職するまでの六年間は、私の青年、壮年時代の数々の思い出を残している。

なかでも、はじめてゴルフを教えられた、輪西のイタンキゴルフ場は忘れ難い。

輪西にゴルフ場が造られたのは昭和五年頃と記憶する。イタンキ浜には天然の芝の美しい草原が広がっていて住民の憩いの場になっていた。製鉄所がそこに目をつけて、ゴルフ場をつくることを計画した。主として設計を担当したのは製鉄所職員の萩原英一さんという人であった。会社の人夫を使って、殆んど自然のままの姿を残して六ホールを造った。グリーンは、はじめ野芝のままだったが、あとで萩原さんがベントグラスを育成して、立派なグリーンを造った。

当時、日本中でもゴルフ場は数少なかったが、北海道は比較的早く、昭和五年頃には、札幌に月寒、銭函、函館湯の川に既にゴルフ場があった。輪西はその次ぐらいで、そのあと洞爺湖にも出来た。

イタンキゴルフ場がはじまったのは、たしか昭和五年と考えられるが、会員は輪西製鉄所職員と、市中の三井物産、北海道炭鉱栗林商船、楢崎造船、各銀行の社員や医師会の織田将一、水科吉郎先生などであった。入会金は二十円、製鉄所の職員は無料だった。

私は診療所の仕事が忙しくて、二～三年は入会しなかったが、昭和八年ごろすすめられて入ることになったが、昭和八年ごろすすめられて入ることになった。そのころ、日本製鋼所病院に、私と大学同級の深水助人君がいて、すでにゴルフ狂となっていた。

「お前が、ここにいてゴルフをしないとは間違っている。ぜひはじめろ。」というので深水より二～三年あとにクラブを持つこととなった。

最初のころは、ゴルフクラブも仲々手に入らない状態だったので、萩原さんの東京の友人から古クラブを送って貰った。殆んどヒッコリーシャフトの古めかしい品物だった。ウッドもアイアンも、パターもヒッコリーだった。

そのうち日本でクラブが製作され、アメリカからも輸入されるようになった。私は和製のクラブを当時の金、四〇〇円で買ったエスピノーザという名前だった。四〇〇円といえば会社員の月給四ケ月分にも当った。小さな家なら五〇〇円ぐらいで建つころだったから、現在の物価にすれば、どれほどか想像されよう。

深水と私は同級でもあり、実に気持ちのよい人物で、まことに楽しい友であった。毎日正午になると電話で「これから行くぞ」と誘ってきた。私は一も二もなく彼の来るのを待って一緒にゴルフ場に行った。朝六時頃にくることもあった。ハーフを廻って、

八時には病院の仕事についた。午後ゴルフをしてから、往診に出かけることもあった。

私の住宅からゴルフ場までは歩いて七、八分の距離の便利さもあった。一時夢中になって、六時頃からゴルフ場に通った。しかし、腕の方はさっぱり上達しなかった。

医師会のゴルフの先輩に、織田、水科両先生がいたことは先きにも述べた。織田先生は開場当初からの会員でもあり、最も熱心だった。織田一英君（北大二十一期）の父君である。一英君は水科先生の息子さん（名前は忘れた）と同じ位の小学生だったが、二人とも実によいフォームで球を打つのに感心させられた。恐らく中学時代はハンディキャップ十五位になっていたろう。私たちは漸く十八か十九位だった。

そのうち、日本は戦争態勢に入り、昭和十六年にはゴルフ場は閉鎖、フェアウェイはポテト畑となり、ハウスは軍の宿舎になった。

織田将一先生は、深水と私を弟のように可愛がってくれて、ゴルフの帰りには必ず私たちを連れて浜町の料亭やバーに連れて行った。先生はすでに、浜町の一角に三階建ての立派な医院をもたれ、流行る医者の一人だった。当時億万長者と噂されていた。いつか、先生がホール・イン・ワンをされて、会員にシャンペンをご馳走されたことがあった。そのころのシャンペンの値段は一瓶二十円だった。その豪勢さにわれわれは驚いたものであった。日本酒一合三十銭の時代である。

斎藤義太郎氏は、私の一年先輩である。昭和八年に札幌から室蘭の現住所に移住された。彼の人柄は、すでに会員諸君も知られる通り、豪放・磊落、人を容るるに寛容、他面、酸いも甘いも噛みわけた粋人でもあった。室蘭に来たころは、すでに民芸の趣味をもっていた。ただ、ゴルフだけには全く手を染めないで過ごした。私どもが運動のためだからと、いくら勧めても耳を貸さない頑固さもあった。恩師有馬英二先生（北大最初の第一内科教授）は、ゴルフ好きで、よく春さきになると、輪西の私の許を訪れられて、ゴルフのお伴をさせられた。斎藤君は恩師でもあるので、先生をゴルフ場まで案内して来るが、先生のゴルフ姿を眺めるだけで、クラブを握ろうとはしなかった。

イタンキ・ゴルフ場は太平洋の波を眼下に見て、断崖から打ちおろし、打ち上げるという難しいコースだったが、夏は数々の海浜植物がラフに咲き乱れ、渚には海鳥が群り、遠くトッカリショの奇岩を眺めるという風光に富む美しいコースだった。昭和二十六年頃、現在の白鳥コースに移転し、イタンキは廃止された。しかし、今も目を閉じれば、当時の美しいコースが思い浮び、その頃の友の姿が彷彿としてあらわれてくる。

だが、友の多くは白玉楼中の人である。私もいつか八十一の歳を過ぎた。過去を振り返り、過ぎしよき日を懐しむのは老人の常である。私どもの過ごした大正時代、昭和の初期の時代は、第一次大戦と第二次大戦の間の、まるで黒い雲の間から覗いた青く澄みわたった空のような平和なよき時代であった。

身の終り近しと思ふ身の始め
しきりに思はるその故となく

—窪田空穂—

# 長田先生からの書簡

拝啓

三伏の候、諸先生には益々御健勝にて御活躍の御様子承り、御慶び申し上げます。

波久鳥第二号御発行の運びとなりましたとの事、編輯に当っての御心労はさこそと拝察致します。

就きましては小生にも拙稿をとの御誘いでしたが、今夏週余微恙あり、筆を起す気力もなく、心ならずも貴意に添い兼ねました事を、心からお詫び申しあげます。

次号には是非と心得て居りますので、何卒御海容のほど御願い致します。

波久鳥も巻を重ねるにつれ愈々充実し、会の親睦に大きい役割りを果す事と確信致して居ります。

先生方の御健康並びに貴会の発展を祈念致しまして、一言御詫びの言葉を申し述べます。

不一。

長田　拝

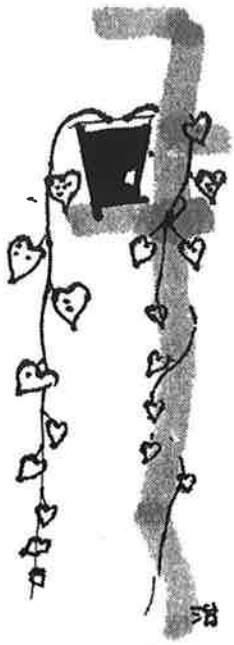
波久鳥編輯委員会　殿

# 今井寅雄先生の消息

元室蘭医師副会長で親交会創設の一員でありました今井先生に雑誌「波久鳥」二号旧友通信の原稿を依頼したのですが、ご返事がなく何とか連絡をと、住所をさぐり電話局に問い合わせ遂に通じました。生憎、先生は御不在でしたが奥様が出られ、とても懐しがられて色々お話して下さいました。

室蘭をはなれて十五年余になりますが、先生は七十五才とても御元気で鎌倉市の自宅から横浜市の診療所へ毎日通勤しておられるとの事です。六人のお子様もそれぞれ家庭を持って他の地に住まわれ、御夫婦二人暮しだそうです。ただ極度の筆不精で通信は望めまいとの事ですが、室蘭在住当時の従業員の方々が先生をこちらにお招きする話がきまり、来年八月頃の来蘭を大変楽しみにしておられるそうです。その時は当時の旧友諸先生にお集まりいただき、再会を喜びたいと思います。（大岩記）

現住所　神奈川県鎌倉市浄明寺六二八
電話　〇四六七—二四—〇三七八
勤務先　横浜市金沢八景東急車輛診療所
電話　〇四五—七〇一—五一五一



# しのぶ草

## 佐藤雄三先生を偲ぶ

中村　秀

新制室蘭市医師会の発足当時、更には室蘭市医師親交会の創設当時の医師会理事として、又、長く副議長として御努力された先生の業績については今更に申し上げる迄もない。それらの事は一先づおいて、側面的にみて、私個人にとっても先生は弘前高校、新潟医大の大先輩であり、何かと御世話になった思い出はつきない。

毎年のように行われた親交会の親善旅行には共に常連の仲間でもあり、東栄先生、大辻先生、長田先生等と共に同室して一夜を楽しい語らいに過したものであった。古くは小生が高校生時代に既に先生は昔の泉町で開業せられており、酒豪でもあり、仲々のダンディ振りを発揮されておった時代である。

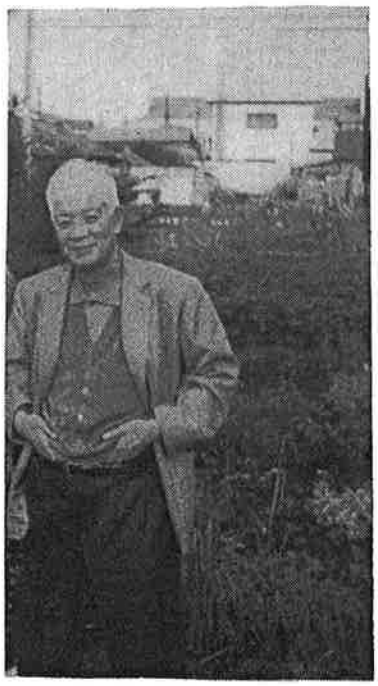
当時、同級の連中数人が小生を訪ねて来蘭したとき、佐藤大先輩宅を表敬訪問をして大変、御馳走になり、その上当時室蘭で唯一の社交機関でもあった浜町角のグランドキャバレー「白鳥クラブ」に招待され、始めてキャバレーなるものを見学させて頂いたのである。その後も先生には最後迄御つき合いを頂き、室蘭駅頭迄も送って頂いたのであった。このように、後輩思いであり、又誰にでも愛される親分肌の暖かい感じのするお人柄の先生であった。然し時には厳然とした態度で医師会等で正論をはかれる時は別人の感があった。

先生は大学の小児科学教室の御出身でもあり、昭和三十四年室蘭市に於て始めて日本小児科学会北海道ブロック大会を開催した際には、当時の小児科医会の徳田、高橋両氏小生等が幹事役を務め、先生に大会長を御願い申し上げた次第であった。当時その準備のため我々小児科グループの全員が先生の御宅に集合して、種々打合せを行ったのも今はなつかしい思い出である。

晩年の思い出としては、小樽市で新潟医大の支部同窓会が開かれた折に、小生の車で先生と御一緒して（但し小生の運転にあらず）小樽迄のドライブを楽しみ乍ら、車中談笑の内に過した一日の事は、今もなお、脳裏に鮮やかであり、又、小樽市では同期の山賀勇先生から小生に「佐藤君を宜しく頼みますよ」と申された言葉が私には佐藤、山賀両先生の友情はもとより、両先生の御人柄が偲ばれて、未だに耳の底に残っている気がする。

思い出すままに書きつづり、もし、先生の御徳を傷つける点あれば、その責は私にあり御詫び申し上げる。

（昭和四十八年五月十三日不帰）



## 遺句

宮本素風

雪深かきことを恐れず農夫らは
昆布拾ふつき来し犬も波に入り
雪つもり冬の心の定まりし
海霧あらし一頭の牛おきあがる
郭公や部落の見えてきて遠く

大久保東陽

カルルスの真夜の湯壺を泳ぐ蛇
熊笹の中の紫とりかぶと
黒百合や島に伝はる異人悲話
浪来ればみな横っとび冬鴉
傷なめて癌とは知らず炉辺の猫

# 父、東陽のこと

大久保 洋平

大久保東陽、本名は慶之助。東陽は俳号なのだが、父には大変気に入った名であったのだろう。子供達への手紙は勿論、親しい知人、友人への賀状や書簡には全て東陽と記されていた筈である

父が俳人になることを信条としたのはいつのことか定かでないが、戦時中の日記の中に

猛吹雪止んで輸送の貨車つづく

と記されているので恐らく昭和十六年頃には俳句への一歩を踏み出していたと想像される。

室蘭は文芸の盛んな町である。地元の俳句同人誌「いぶり」に所属して晩年まで句会や吟行を楽しんでいたようであった。虚子主幹の「ホトトギス」、その後「玉藻」にも投句をしていたようで別掲の東陽遺句

カルルスの真夜の湯壺を泳ぐ蛇

は「玉藻」の特選句になったものである。

昭和三十五年頃からは師を平松措大先生と決め「狭霧」（さぎり）に投句して指導を受けていた。措大先生をお招きして北海道各地を吟行するのが父の至上の願いであったため、その下準備のつもりで四十年夏に初めて根室、釧路に出掛けている。翌年は道北地方を計画していたのに秋に体調の異常に気づき、間もなく病床に伏してしまい、翌年の夏に岡山まで先生をお迎えに行く約束を気に懸けながら四十二年一月十九日の朝、他界した。

最後となった「狭霧」への投句原稿から、

ホ句按じ菊に向ひて物言はず
小春日や句を拾ひつつ燈台へ
吹き溜る落葉に溜る日の温み

四十一、十一、十二東陽

**大久保慶之助　略歴**

**明治三十二年秋田県小坂町に生れる。大館中学、北大予科を経て大正十五年北大医学部を卒業。一期生。医博。北大医学部皮膚泌尿器科教室副手のあと郷里の小坂鉱山病院に勤務。昭和七年室蘭市大町（現中央町金市館）で開業、一年半後に裏浜町（現小西木材）に医院を新築移転した十四年学位取得のため廃業して北大へ戻る。十六年室蘭日鉄病院（現新日鉄病院）が開設されたため皮膚泌尿器科医長として赴任。二十年秋に退職して東室蘭駅前の工藤医院跡で開業。二十三年に幕西町へ、そのあと中央町（現名取）にと転々と居住した。四十二年一月病死。趣味多く読書殊に宗教書を愛読。戦前は骨董、刀剣、盆栽に精を出していたが、戦後は俳句と囲碁であった。**

# 故中村孝先生

東　栄

故人の追憶の記を私に托されましたが、考えて見ますと、亡くなられたのが十二年前ですから今生存されて居られれば私に近い年令であり、（私より四才年下）それに開業期も私より半年後の関係で約三十年間のご交際でしたからそれなりに憶い出も尽きないものがあります。

会員の年配の先生方はご存知のことでしょうが故人は肥満タイプで寡黙茫洋とした風貌は何となく大人の風格を思わせるものがあり、それも生い立ちが室蘭の初代市長として令名の高かった中村俊清氏の御曹子（中村秀先生の令兄）であったことからも成程と思われるものでした。従って真面目で温厚な人柄は患者の信頼も深く社会の信望も厚い方でした。

故人は酒を嗜まず私の様な呑平の凡俗とは違いますので酒等を介してのお付合ひは余りありませんでしたが、何と言っても民芸協会を介しての触れ合いが一番でした。民芸については室蘭民芸協会創立会長であった故斉藤義太郎医師会長（民芸に関してはその造詣の深さに於て第一人者でした）の良き協力者として民芸を理解し、その鑑識眼にも勝れ、数々の名品も収蔵されて居られた様です。従って、斉藤会長亡き後二代会長として民芸協会の運営に当られたのでした。

尚、故人の他の一面は非常な食通であり、色々な旅行等を通じて全国各地の珍味美味に詳しく、それこそ美味求真を楽しまれた様でした。民芸協会は毎年各地で廻り持ちで全国大会が開かれ、会員にとってはその地の民芸品の鑑賞や収集、それにも増しての食味（これも民芸の一部）の楽しさは他の会には味わえないものがありました。こうした事で私も何回か行を共にし（多くは家内同伴）故人のお得意の食通を通じて美味を楽しましていただいたことは何より嬉しい思い出として残って居ります。

その故人もいつしか病魔に浸される運命となり、糖尿、高血圧心臓疾患と療養に専念されたものの、その効なく遂に昭和四十五六十二才を一期としてこの世を去られたことは、医師会としても又民芸協会にとってもこれからの御活躍を期待した方だけに惜しみても余あること、残念に思われてなりませんでした。

今私のこの拙い追憶を記すに当り、在りし日の温眼を偲びつつ感無量の想いで故人の霊に合掌いたします。

（昭和四十五年三月十三日不帰）

# 短歌

## 蓬莱旅情

緑り濃き台北市街　眺望佳し
わけて朱色は　鮮かに映ゆ

故宮てふ博物館に　感動す
中国偲のぶ　資料豊富かに

聳え立つ絶壁層は　大理石
世界無比なる　太魯間峡谷

大佛の見下ろす港湾　基隆は
要塞数多　雨に煙りつ

台湾の歴史を語たる　展似館
蠟人形は　実物の如

音に聞く万寿公園　三寶宮
高雄市街は　名所多し

## 皆川英貞

溢れ出る汗を拭ひつ　廻りたる
清澄湖畔　風光うるはし

始めての紹興酒に　ほろ酔ひて
四川広東　美味に満腹

生きた蝦夷　魚貝ゆたか味うまし
海鮮料理に　満ち足りしかな

一夜はクラブ麗都に　カラオケを
楽しむ朋友と　時間を過しつ

グループは飲み喰ふ買ふの娯楽を
求めて翔べり　蓬莱の島

台湾ツーアーに参加して
55・4・10
56・5

# 俳　句

「ケニア・セイシェルの旅」

曽根清孝

朝露を踏み早朝のサファリへ

セーターを着てサファリの夜をすごす

サバンナはいつもどこかに虹のあり

サバンナの涼しき夜の宴かな

スコールの虹を伴ひゆきすぎぬ

スコールの過ぎれば虹のあらわれぬ

スコールを気にせずパーティ続きおり

いな妻を伴ひ夜のスコール来

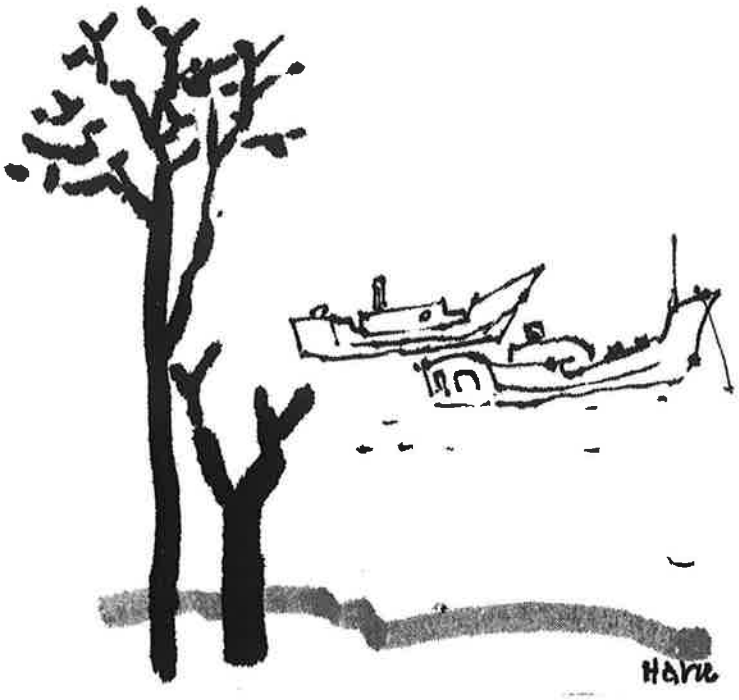
ロッジの戸皆開け放ち大昼寝

冠雪のモルゲンロートに乾杯す（キリマンジャロ）

# ‖わが青春‖

## 北大予科柔道部

池田満穂




私は昭和六年四月北大予科に入った。札幌一中時代の柔道の先生兼元藤兵衛九段が、北大柔道部の師範でもあったので柔道部に入らざるを得なかった。

当時の北大柔道部は、全国高専大会で四高、六高、松山高校と覇を争う北方の名門であったから、その練習は猛烈を極めた。道場は正に地獄といってよかった。作家井上靖は「北の海」で四高柔道部の地獄の青春を描いている。日曜・祭日なく、春夏冬の休暇は合宿練習だから三六五日毎日最低二時間以上の練習が続くのである。練習の苦しさは悪夢にまでみた。柔道が飯よりも好きで学校を留年までして柔道をやったという先輩達が沢山やってきて一息つこうと坐って帯を直していると「お前こい。」というわけで休む暇を与えないのである。寝技は身体の重心の技でもあるから「何だ、貴様のそのケツ！」と尻を蹴とばされるとこともたびたびあった。下にされ起きられず悔し涙を流して噛みついたこともあるが「大分根性が出てきたな。」とこの事は怒られなかった全国優勝を果たせなかった先輩達が何とかして後輩達にという執念が道場を地獄にさせるのである。

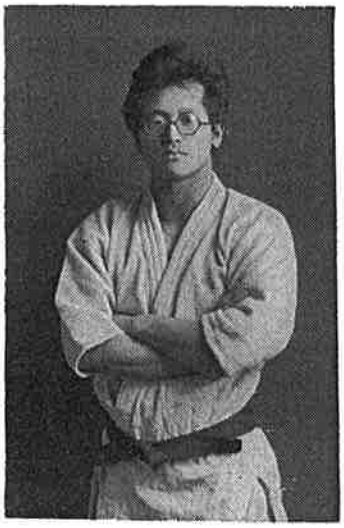
私が予科一年生のこの夏、北大予科は初めて二高に敗けて全国決勝戦に出られなかった。秋十一月、恵廸寮が新築され、柔道部は南寮の二階に入った。翌年、春頃から北大赤化事件が起り、教授、助教授、学生が多数検挙された。予科柔道部主将として部員

に敬愛された米沢主将をはじめ、部員の中からも、学部の先輩の中からも多数の検挙者が出た。結局、予科柔道部の二年生では、私と嵯峨二人だけが残った昭和七年の夏の大会は、残留部員で戦ったが予選で敗けた。そして私が首将、嵯峨が選手監督となり、崩壊した柔道部の再建の道を歩むことになる。幸にこの年、有望な新入部員を沢山迎えた。高橋照信や堂垣内尚弘、島田、堂前等々である。兼元師範、前予科主事青葉万六先生、理学部教授鈴木醇先生、野附先生や多数の先輩（この中には私の後年の恩師松岡幸七先生も入る）の懸命の努力に支えられ、昭和八年夏、東部決勝戦で弘前高校と引き分けになった。十五名宛の選手の勝抜き勝負だから小数で敵の大将まで迫り、味方を何名か残せば勝つのだが、この時は予科高橋照信と弘前、斉藤の大将決戦となり、規定の三十分で勝負がつかなかった。抽せんで全国決勝出場を決めることになり、私が出てくじを引いたら敗けた。「お前の気持ちがだれているから、くじにも勝てないんだ。」と某大先輩に叱られ肩身の狭い思いをした。

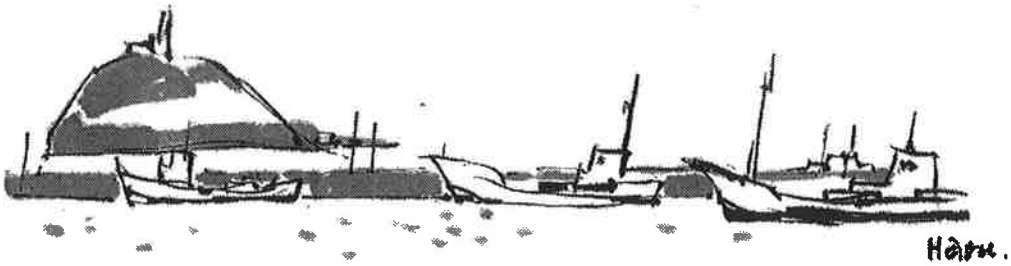
大会が終ると、夏休みのうちから来年のための合宿練習が始まる。私の予科三年の選手生活は終ったのだが、今度は先輩としての柔道生活が始まる。後年、夕方練習の時間が来ると南寮の二階で池田の「行くぞ」と叫ぶ声が鬼の声に聞えたという後輩の話を聞いて、そうだったかなと思う。

昭和九年夏、私は学部一年だったが、高橋照信主将以下の北大柔道部員を引率して仙台に向い、東部で優勝した。昭和六年以来三年かかって雪辱したわけである。更に南下して炎天下の京都に向った。全国優勝は東部、中部、西部の代表三校で争う。中部の松山高校は不戦で残り、先づ第一日目は西部代表大分高商と対戦したが、互角の勝負で大将決戦となり、夕刻雷鳴轟き暗くなった武徳殿で北大予科の大将高橋は遂に敵の大将河村を抑えて勝った第二日は松山高校との最後の決勝戦である。私を含め数名の引率の先輩でオーダーを作るのに激論沈考を繰返し夜明けになってしまった。松山高校は北大予科の宿敵で過去に勝ったことがない。戦いは互角で北大予科が一人抜き、一人抜き返され後は引分けでとうとう大将決戦になった。松山の大将佐久間は先に大内刈で業ありをとり、私の心臓は止まる思いであったが、一瞬、高橋照信の打った釣込腰は佐久間の身体を大きく跳ね上げ、畳に落ちた所をすかさず崩上四方に抑えて佐久間を動かさず遂に北大予科は全国制覇をなしとげた。この時の光景は四十七年経った今でもはっきり思い出せるのである。現北海道知事堂垣内尚弘君もこの戦いに名を連ねた選手である。

私は自分の青春を他に誇ろうとは思わない。青春は自己が絶えず揺れ動き不安定で、自己嫌悪や劣等感に悩まされる時期である年をとるに従ってその振幅は小さくなるが、その代り都合の悪いことは忘れ、過去の人生を美化したがる。私は何のために、何が目的で苦しい柔道をやったのか今でも解らない。それを今意味づけようとは思わない。ただ自分の人生にこんな青春があったということを乞われるままに書いた次第である。



# 随想



## 〝スウェーデンあれこれ〟

小國親久

〝港祭り〟には珍らしい爽やかな今日の天候、今迄心重く気乗りもしない儘に渋っていた原稿のことが、フと気になった。それも今日の天気と彼地の友人からの久し振りでの便りの所為かも知れない……。

五・六枚でスウェーデン事情など、とても書き尽くせるものでもないし、況して今更ながらの古いスウェーデン事情でもあるまい。

北緯55度前後から北極圏に至る長いスカンジナビア半島の東半分以上を占めてスウェーデン王国がある。日本に比べて一倍半以上もある国土に人口は約七百万に満たない程度、北に位置しながら暖流の影響で冬こそ北部なら零下三十度位の気温になるが南部はそれ程でなく、首都ストックホルムでは、札幌よりも暖かいかも知れない。

恰度、現在の季節は、白夜の終りに近付いたところで、観光客で賑わって居ることだろう。

スウェーデンと言えば、日本人にとっては福祉国家、フリーセックス、スウェーデン鋼……などといったイメージが浮かんでくる。だが、まだまだ色々な名物?有名なものや人があったりする。有名なノーベル賞、ワルトハイム国連事務総長、イングリット・バーグマン―。ノーベル賞のノーベルは、スウェーデン式にはノ・ベールだし、イング・リート・ベェリイ・マン―。そんなこんな数えて行けば、とても五・六枚でスウェーデン事情など……オコガましくてといったところ。それも、この原稿を書き渋る事情の一つと言えそうだ。

日本から見れば、予想もつかないことの

一つに、準禁酒国―ワイン以上は専売局、つまり、国営の売店で定まった時間に買わなければならないし、レストランやホテルもアルコール飲料の販売免許を持って居る処と然うでない処がある―でありながら、世界有数?のアル中国であるなども耳新しいことかも知れない。

福祉国家には間違いないが、税金や福祉に関係する支出も、国民にとっては頭が痛いことの一つだし、老人や子供は余りにも恵まれ過ぎ?たためなのか、自殺が結構多い。他国籍人の労働者が多く、それなりに人種問題やら社会問題がある。景色は美しく、湖―たとえばストックホルム附近でも何百何十の湖沼がある―が多くて、北海道と似た気候風土とも言えそうで、スウェーデンに行った当座、私の居た所は特に然うだったのかも知れないが、ビェルン・スタード、つまり白樺の市と言われる程に白樺の木がスウェーデン風の住家の周りや街並みに多く、取っつきが悪いけれど正直な人種と思われる―同じ北欧人や北欧の国でもデンマークは取っつきやすく陽性だが人が悪いと、スウェーデン人は言って居たし、事実然うだったが――。

一般に長頭・長身で、体格が良く、八頭身、特に女性はアッシュ・ブロンドの髪、青〜青灰色の目の人が多く、どれもこれも女優かモデルに見えるかも知れないし、ブロンドに弱い日本上にとっては、噂に聞くフリーセックスはそれなりに難かしさがあり、往きずりの日本人が体験すべくもなくスウェーデンに少なくとも三ヵ月以上も住まなければ…といったところ。

第一次大戦以前から戦争を知らない国であり、国民なのだが、それなりに犠牲を払っている。ロシアや他国に侵略されたり、占領されたり、色々とニガイ体験をもつことが、侵さず侵されずをモットーとして、強力な軍備、徴兵、国防軍組織、核戦争に備えての地下都市の整備などを実施することになる―これは何処やらの国の喧ましい人達に、それこそ体験させたり実見させたりしたい位だし、その人々が理想?とする国やら人やらは、侵す侵されず奪うをモットーにして、他国の領土や人・物資をほしいままにしているとしか言い様もない――軍用飛行場は全べて地下で、美しい風景に見とれていると、突然、森林の中から急上昇飛行をする軍用機に驚ろかされる。王様は国のシンボルで、現王が皇太孫の時に私が居た訳だが、常に新聞やらTVで国民の義務としての軍事訓練―陸・海・空―に率先している様子が報道されていた。我が国では敗戦以来、全くそんなことはないし、軍備反対を叫んでいる人は、自国や自分を誰かが保証して呉れるとでも思っているのだろうか?

筆の方向が逸れてしまったようだが、矢張り一年余りも日本語を喋べらずに生活し学会などで其後も一、二度訪づれた私にとっては、懐かしい友人・知己や想い出のある国に違いない。

秋から冬へのたたずまい、クリスマス前のルシアの祭り、正にホワイト・クリスマスの街、そして冬から春を迎える人々や土地、春から夏への白夜の季節……。スメルゴス・ボォードや土地土地の診味、人情などなど、過去のことどもが、未だに活き活きと想い出されてならない。

# くたばれ！パリス!!

畠山正照

ゴルフを始めてから旅行というものはほとんどしなくなり、いや、以前から用事がない限り旅行のための旅行はしたことがないので、今回「旅行記を」とのことでありますが、さて、どう書いたものやら！

学生の頃は、親の家が長崎にあって年一回、夏か春休みには帰省していたのですが札幌から汽車の乗り次ぎで時間合わせをして直通で行くことはなく、たいていどこかの街（市）に汽車にあきた時は降りたものでした。

まず、駅前のパチンコで機械の調子を見ながら、その土地の言葉を耳にし、次に、にぎやかそうな通りを歩いて行き、書店を見つけただ読みでなく、ただ見し、現在の自分の位置と繁華街の方向を調べ、安酒を一杯と何か土地のものを食べる。それでその街の全てを知った気になる。もちろん、その街や周辺の観光地、名所、旧跡等へは行かない。

そんな私が、正月休みを利用してスペインへ行くことになりました。知り合いの先生達も何人か参加された団体旅行です。目的は、何かうまいものを食いたい。ゴルフをしょう。それと美しいセニョリータとデートができれば！とひそかな思いを秘めて旅立ったのですが、私にとって思わぬ事態となりました。

それは、飛行機の予定が変更となり、ロンドン経由のところがパリ経由となり、夕方までの日中、パリ市内観光をすることになりました。芸術の都だの、（何とかの都だの、）ファッションはパリからだの、ねこもしゃくしもパリ！パリス！で以前から世界で一番行きたくない街の一つと思っていましたが、まして観光バスに乗せられるなんて。

最初にバスを降りたのがノートルダム寺院。寺院内を見る気はなく、前の広場で皆が出てくるのを待っていました。

すると、女の子が三人（十才から十四才位）近よって来て、ワイワイ訳のわからないことを言い、一人は新聞紙の束を持っている。買えという意味かと思い「NO、NO」と首を振ると両側から袖を引っぱられ囲まれました。どうして俺はもてるのかなと思い、なおも断わっていると、三十秒位でニコッと笑ってかけ出して行きました。その時、あっと気がついて上着の内ポケットを見ると、旅行用小切手が抜きとられていました。

添乗員に両替を頼んでおいたら、成田空港で渡されたもので折るわけにもいかず、そのまま内ポケットに入れておいたものです。これじゃ使いものにならないと思い、空港で別にドル紙へいの両替をしてきたので、旅行中、不自由はありませんでしたが……。サインをしておいたので日本へ帰ってから全額戻ってきましたが、パリのイメージをなお悪いものにしました。と同時に観光地でボケッとしているような自分のスタイルに合わない行動が悔やまれました。

すっかり気分を悪くして、昼食の時以外はバスの中で寝ていました。

午後からスペインのマラガへたちました。（もうこんな所には来ないぞ！と思いながら）マラガでは、みんなと別れてM氏、F氏と翌日は待望のゴルフ。スコアは悪いが、のんびりと、地元のゴルファーもめったに来ない旅行者と思ってか、我々の進むホールをあけてくれたり、気をつかってくれます。クラブハウスでの食事は本当にお

いしいものでした。ホテルをはじめ、旅行社が予約をして食事をするところは、日本人の好みに合わせた味つけをしているので同じ料理でもちがった味です。

翌々日は、アンダルシア地方の観光をせず、お先にマドリッドへ。F氏と裏通りの酒場を飲み歩き、うまいつまみ、料理を食べ、セニョリータとデートをし、この大都会では日本人の顔は一度も見ず気分爽快でした。

ところがまた予定が変り、マドリッドを一日早く立ち、パリに一泊することになりました。全く不愉快なことですけど、飛行機の都合、まして団体旅行ですので仕方ありません。ホテルから出ないつもりでいたら、K先生がパリのイメージチェンジのためといって、皆なでショウを見に行くことになりました。

名前は忘れましたが有名な劇場です。ラインダンスのようなのばかりで全然おもしろくなく、（私はストリップの方が好みなので）一人で先に帰りました。ところが、タクシー代を十ドルも請求され（せいぜい一～二キロメートルのところ）また、不愉快になりました。もう、どんなことがあってもくるもんか。

くたばれ！　パリス!!

（畠　山　記）

# 「旨（うま）いもの」

吉井正仁

さき頃、産婦人科医会の記念誌に〃うまい店〃紹介の小文をのせたが、室蘭でこれという程の〃うまい店〃はちょっと思い付かなかった。輪西の〃蘭亭〃、東室蘭の〃ちしま〃それに〃のざき〃とか〃塩釜〃についてまあまあと言う程のことを書いたにすぎない。本州あたりから珍客などがあると案内する店にいつも困っている。崎守の〃北の茶屋〃で〃ゴマスリちゃんこ鍋〃とか、同じ崎守の〃志摩〃で〃成吉思汗〃などをつついてお茶をにごしている位である。どこかよい店があったら教えて欲しい。

〃うまい店〃ではないが、この四月に移転オープンした丸井デパートの地下に、大金畜産の肉屋さんが入っていて、種々な肉を置いている。私の病院のすぐ前だから、ちょくちょく覗いている中にすっかり顔なじみになって、いろいろ美味しいものを教えてくれる。それで試食してみて、〃うん、これは旨い〃と思ったものを紹介すると、まずステーキ用のラム（エリザベス女王の好物とか）、中国産の野鴨、骨付豚ロース、ミートローフ、ソーセージなどであるが、特にソーセージは絶品で、デリカテッセンとか、他の名のある店のソーセージよりは数段上等である。まあ、味の好みもあろうから一概には言えないが、一度ご試食をおすすめする。

鮮魚コーナーで〃つぶ貝〃と〃くじら〃の刺身をつくって貰ったが、これも仲々であった。

余談だが、物資欠乏の時代に育った私はスーパーとか、デパートの中を散歩（？）するのが好きで、種々な物資が豊富に陳列してあるのを見ると、何んとなく嬉しくなる。買う買わないは別で、最近は食意地がはってきたせいか、食料品コーナーあたりをうろ付くことが多い。急病センターのS先生には実によく出会うが、先生もこの手の散歩がお好きなのでは？

# 妻、母、女

桜庭シゲ

ほんの僅かのクランケが相手なのだが、土曜の午后ともなれば、矢張りヤレヤレで心も軽く浮き浮きしてしまう。

テレビは女太閤記を放映している。太閤記を女性の立場から捉えたドラマで、出演の俳優さんも皆好感持たれる人々だし、何よりも主演のねねさん、佐久間良子さんが美しく、北政所のねねさんを彷彿させる妻の座の演技が美事で、遂々みとれてしまう。それにしても、天は二物を与え給わず、とか、此の賢明なねねさんに実子が恵まれていたら、ああも他愛なく豊家も滅亡しなかったろうに等、又淀殿とて武家出身なのだから、我子可愛は尤乍ら、成人した秀頼に武将として決戦の総指揮の場を、何故与え得なかったのか等と。ひたむきな演技につり込まれて、合の手も入り、ねねさんが一入愛おしくなって来る。ねねさんは実子は授からないが、養子、養女、幼い家臣を立派に育て、賢母の姿が読み取られるが、淀殿は只一人の実子のみ溺愛して、豊家の滅亡に拍車をかけてしまっているのではなかろうか。

対蹠的に、秀吉と云へば、御神酒徳利の様に、家康が浮かぶが、此の家康の生母、於大の方は、戦国の悲しい慣いで、本人には何んの不都合もないのに、生木を裂かれる如く、幼い竹千代を残して松平家を離別される。於大が送り帰され、実家の水野の領地に入った時、送って来た松平の家臣は帰し、水野家臣、農民に輿を担かせたと云う。当時、此の様な場合、送り届けた相手の家臣は切り捨てられたと云う。愛児の松平家と母の水野家との間に、禍根を残さぬ配慮と云われているが、武家出身の母が、子に尽くす、仕える心配りが良く頷づかれる。此の思慮深さが家康の為人に大きく影響を与えているのではなかろうか、一寸肩肘張ってしまったが、くだけた一つの逸話が今も胸に染込んでいる。

『やわ肌のあつき血潮にふれも見で』の歌人与謝野晶子女史のエピソードだが、長男のお嫁さんが、『母を語る』の随筆中に主人から聞いた話として、御主人の小学校の遠足の事が書いてある。

まだ売出し早々でかなり貧しい生活の頃で在った。当時としては珍らしい遠出が催れ、参加して良いと許可は得たが、どおも参加出来る状態とは考えられず、子供心に

案じられたが、かと云って、直接多忙な母に聞かれず、不安のうちに日を重ねた。遠足当日、目が覚めたら自分の枕元に、真新らしい衣服一式がきちんと揃えてあり、跳り上って悦び、勇んで遠足に参加したと。現在の様にデパートに行けば何でも一式調えられる時代でない。日々の営み、加えて文筆と多忙な生活の中、専ら夜業仕事で、母の真心こめて仕立上げられた物であろう

当日源氏物語を読んで偉大さに感激し、高嶺の花と仰ぎ見ていた女史に、何処にでも見られる母の姿に触れ、身近な親しみが湧き、一段と尊敬の念が高まり、今も尊敬する女性の一人である。子供に尽くす事、仕える心、親たる者に課せられた責任、義務でなかろうか、不遜と云われるかもしれないが、私を生んで下さい、と頼んで生れた人は一人もいない。親の意志で此世に御目見得させられるので、言わば、一種の被害者の位置にあるのではなかろうか、何んとか生き抜かれる様に仕上げる事、少くとも方向づけてやる事は当然の任務であろう努力する謙虚な姿が、子供心をゆさぶり、親の慈愛と受けとめられて、子供は正しく伸びていくのではなかろうか、何を古めかしい事をと云うかもしれないが、それなら今、ベストセラーの『窓ぎわのトットちゃん』を読んでごらん、トットちゃんが今日あるのは、小木校長先生に巡り会えたからで、ママが、トットちゃんに尽す心、仕える心があったからこそと、よーく理解出来ます。

太閤さんも大阪城に居住が安定すると、色々の事情あってとは云え、数多の美女に取囲れてしまい、それなりに御満足であったであろうが、ねねさんは定めし、何事もおかか、おかかでまたお前様、お前様の頃が懐しく人知れず泪を流した事であろうが賢明なねねさんは、あっさりと、女の座は提供してしまい、自分は妻の座にどっかりと座してしまう。秀吉も承知しているからこそ、大徳寺事件で、利休居士は処刑されたが『他ならぬ北政所の嘆願故助命す』と決着したかったのだが、『此際女の嘆願等迷惑に思い、太閤の差し金である事察知するであろう。太閤の威信を失うと仲介を承知せず、今后此の様な事繰返えされぬ様心されよ』と一本釘を刺している。美事な妻の姿勢でなかろうか。

また美事に妻の座を貫かれた女性に、特統天皇を挙げ度い。夫、大海人皇子が、兄、天智天皇に皇位継承で疑われ、身の危険を感じ、剃髪迄して吉野に落ちのびるが、正妃であある鵜野皇女は、幼い実子草壁皇子を伴い、夫に従い敢然と大津宮を去っている（大津宮は、父、天智天皇の皇居）後世、壬申の乱と云われるが、天下晴れて夫を世におくり出している。即ち天武天皇。やがて御自身も皇位を継がれる事になる。大海人皇子も大勢の妃が待っていたし、衆知の額田王とのロマンスは、皇女にとっては、苦々しい限りの事と推測されるが、それはそれ、これはこれと、美事な判断、行動で妻の心意気、愛情を惜しみなくふりそそいでいる。天皇もこれに応えて、後日、皇后の病気の折、平癒祈願に薬師寺を建立された事は衆知の事であろう。歴史家の中には大津皇子の処置で、云々されるが、矢張り女性ナンバーワンの御方ではなかろうか。

当節、夫の愛人問題で、僅かな手切金ですごすごと引下ったり、時には刃傷沙汰に及んだりのケースがあるが、妻の座を盾に浮気者に家を去ってもらったらいいのでなかろうか、それこそ男女同権主張の最適の場でなかろうか、私だったらそおするが、尤も相手がもういないから、そんなにサラサラ云われるのかも分らないが、女の座はかんたんに提供出来るが、妻の座、母の座は、そおはゆくまい。何故って、女性の幸福と云う終着駅ではなかろうか。

# 裸足になった女房

M・O生

ゴールデンウイークが近づいたのに、この年は旅行予定が仲々立たなかった。新聞の旅行募集で東北花見の団体旅行が目についたので女房に持ち掛けたら私も一緒に行くと云う。

桜の満開時には、一寸遅れたが未だ十分楽しめる状態であった。特に秋田県角館(かくのだて)のしだれ桜は、武家屋敷を背景に京都を思はせる仲々の風情である。十和田湖の早春も結構であるし、バスの中から見る春耕前の沿道風景も清々しい。見物場所へ着くとバスの添乗員が旗を立て、そのあとからぞろぞろ列になって歩く例の団体さんスタイルである。老人が多いと思ったらむしろ若い女性が多くとても賑かである。只だ困った事に女房は私と違って歩く事が大の苦手である。出発時に並ぶ時には一番前につくのであるが歩き出すと段々遅れて最後尾になってしまうので私は気をつかう事はなはだしい。

帰路青森駅では団体なので連絡船乗り込みは一般乗客に先立って改札口を出発した例の隊列を作って桟橋に向ったが、私達二人は階段と長いホームで最後尾からはるかに遅れてしまい、隊列はもう向うの階段を上って見えなくなる。女性の添乗員がはぐれては困ると私達に寄添ってくれるが仲々スピードが上らない。私は遂に我慢しきれなくなって「もう少し急いで歩け」と語気を荒げた。とたんに思いがけない事が起った。女房はやにわに靴をぬいで靴下はだしで駆け出したのである。私も驚いたが、ホームで上野行の列車を作っている乗客が一斉に振り向いた。そして、ささやきが耳に入って来た「気違いが護送中に逃げ出したのだろう」。もう私はいやだ。

## ―グループ紹介―
# 三木会

室蘭・登別・伊達地区の産婦人科医が、許月の第三木曜日に集まる勉強会。竹内隆一先生の音頭で発足した当初は、市内三大病院の持廻り当番による新着外国文献の抄読会であったが、昭和四十五年頃より優生保護指定医会としての性格が強くなり、臨床的な討論が主となり、勤務の若い先生方からは最新の知見について教えて戴いたり、又開業医の抱える諸問題にも耳を傾けて貰ったり、今日的な産婦人科医のあり方をフランクに語り合う場でもある。又、民芸、絵、音楽、園芸のマニアの先生方から、そのウンチクを披露して戴くのも裨益する処多く、旅行や学会の報告も聞き逃せない。年に二、三回は大学のオエライさんを招いて神妙に講義を受けると思えばゴルフ会に汗を流し、釣に興じ、時には打ち揃ってネオン浴を楽しむ〃翔んだ〃グループ

各地の産婦人科医会との交流も活発で、特に函館・苫小牧・日高地区を併せた道南合同

# 「小股の切れ上った女」

池田洋二

表題の件は六月の親交会旅行の帰りのバスの中で話題となったのだ、気に止めていた所、ある書店で立読み中、岩波新書54「読書こぼればなし」の五〇、五一頁に、同名でさらに、八〇、八一頁に同、再考として記載されていた。一寸抜き書してみるとすらりと背が高く、おきゃんで小意気な女を評した古い言葉に、「小股の切れ上った女」というのがある。「大言海」によると「女／背／スラリト高キオ云ウ」とあるだけであり「言泉」はといえば、これもまた「丈のすらりとして小意気なるさま（女にいふ）」とあるだけ。

故平山芦江氏の随筆「大江戸の迷児」のいうのを読むと、次のような具体的語源説が出る。元吉原のさる老遣手姿さんからの伝聞話として紹介されているのだが、それによると、もともとは廓言葉から出たものだとある。周知のように花魁には道中というものがあったが、まだ突出しの時代には内八文字という踏み方をするが、これがお職ともなれば外八文字を踏むようになる。内八文字と外八文字と踏み方の解説までしている暇はとうていないが踏み方、つまり歩き方の内外といえば、たいてい想像はつくかもしれぬ。要するに内八文字は歩幅も小さくすべてしおらしく見えるが、それに対して外八文字となると当然歩幅も大きく派手になるというのだ。

女らしさ、色っぽさを失うことなく、しかもこれを小味よくきりりと踏むというまでには相当の修練を経なければならぬ、さてこそ鮮かに外八文字の踏めるようになった花魁のことを小股が切れ上ったと評するようになったというのだ。なるほど、これなら修練による股関節あたりの変化ということも考えられるかもしれぬ。

池田弥三郎氏「言葉のフォークロア」に「こまた」はやはり身体の部分であって、その線がたてに深くはいっている女のことで、それは結局「床よし」の女のことをさすというのだ。驚いたのは小股は「眼じり」に疑いなしとの説であった。したがって小股の云々は、「眼が切長で妖艶な女」というほどの意だというのだ。

要するに問題は大別すれば「小股」云々をそのまま直接ヨニに関連させて解釈するか、あるいはより広く脚部全体について云ったものと、とるかその二点につきるようである。

研修会は、年毎に充実し、年一回の愉快なギネ祭りが、函館と交代で行なわれている。

発足以来二十年、今日まで欠かさず続けて来た事を誇りとし、昨年は三木会二十周年記念誌を発刊してハクをつけ意気大いに上る。而しこの二十年間の歩みは平穏な道程でもなかった。様々なトラブルを乗り超えて来ただけに、同志的な結束は固く、加えて斯界のボスである現小国親久会長をいただく室蘭三木会の名は中央に轟いており、うるさい存在である。

日進月歩の医療に即応すずく、生涯研修の場として、地域医療の向上をめざし、信頼をとり戻すためにも、この会は何時までも続けられねばならないし、よりよい成長の為には和気靄靄たる中にも、常に切磋琢磨を忘れてはならないと思うのである。

（文責村井乙）

# 「甘香」

吉井正仁

道医報に〝本日求真〟なるコラムが新設され、マスコミにもの申す〟とか〟診療報酬一私はこう考える〟あるいは〟マスコミにも中さず（？）〟などのテーマで、各医師会の先生方が自由にもの申しておられる

この春から室医広報担当を仰せつかったので、この所道医会報や室医会報などの原稿あつめの下請けをしているのだが、親交会誌や記念誌などの編集にたずさわった人ならお判りと思うが、原稿依頼ほど頭を悩ますことはない。二つ返事で引受けて下さる方はまず稀で、渋々嫌々、なんのかんのと云われながら、〟そこを何とか〟とひたすらお願いするわけである。漸く頂いた原稿はと見ると、これがなんと、隠れたる才能を思わせる名文でびっくりさせられることがしばしばであるが、なかには渋々嫌々のわけが判るようなのも偶にはある。しかし概して、お医者さんには文才のある方が多く、ご自分で気付いていない方も結構多いようである。

今回も道医報〟本日求真〟欄への投稿をご依頼すべく、室医会員の名簿をながめながら、「ああ、いいよ」と実に物判りよくお引受け下さる先生はいないかなアーと探しているうち、フト思い付いて、あの先生ならとA先生宅にお電話した。ねらい違わず、まあ大体において快くお引受け頂いてヤレヤレと思った途端「それはそうと、私からもお願いがあるんですがねエー」「なんでしよう」「実は親交会誌2号の件ですが、カットをいくつかと何かコメントを頂けないでしようかねエー」

まことにうかつであった。彼は親交会誌編集の主要メンバーであったことをすっかり忘れていた。ああ、不覚!!、不覚!!

我が家の猫の名は初代から現在のⅥ世まで、オスでもメスでもすべて名前は〟アマコ〟である。初代のアマコが大の甘党で、甘ったれだったからであるが、Ⅴ世からはペルシャのチンチラになり、血統書の正式ネームまで〟AMAKO—Ⅴ〟とかⅥとかになっている。Ⅵ世になって〟甘香〟という漢字の名を付けたが、読み方にやや無理があるとはいえ、芸者の源氏名のようでもあり、気に入っている。

Ⅴ世までは一匹だけを溺愛して、病気で亡くなったり、何処かえ逐電したりしていなくなると、悲しんでいるのも束の間、何時のまにか次のアマコが闊歩している。

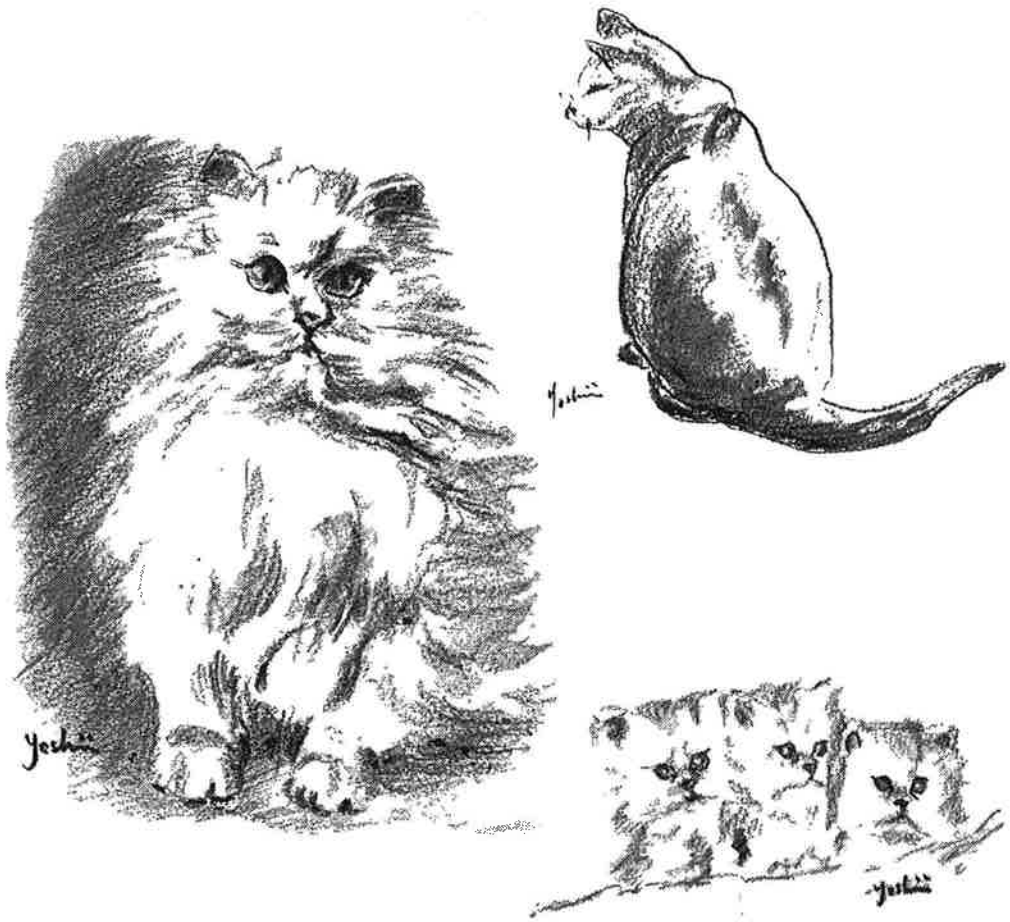
Ⅴ世が亡くなった時は、悲しみのあまり、しばらく虚脱状態が続き、「もう生きものを飼うのはやめよう」などと話し合っていたが、もののはずみ（？）で、チンチラの〟プチ嬢〟がまた家族の仲間入りをするようになった。その後〟ビアン君〟がむこ入りしてきて、我が家としては初めて二匹の猫が同居するようになった。〟ビアン〟とはトレビアンのビアンで、名前どおり仲々の美男子である。

アマコという名も、これで一時途絶えていたが、この夫婦が今年の1月初め、初子を一匹生み、漸く〟アマコⅥ世—甘香〟の名が復活、ところが五月末にまたまた三匹の子どもを生んだため、今や大世帯になってしまった。

五月の三匹は、そのうちの一匹が漸く最近〟ミュート〟なる名前を貰ったが、他はまだ名がない。〟チビロク〟とか〟総領〟とか呼ばれているが、この三匹の子猫たちがじゃれているさまを見ていると思わず頬がくずれてくる。〟ミュート〟は猫の鳴き声をもじった、極めて音楽的な名であると自讃している。そんな訳で、現在六匹のチンケラが家中を走り廻っているが、その他にまだもう一匹いる。真黒な盲目の猫で、

名前は〃ルミエール〃という。暗黒の世界に同情して〃光〃を意味するこれまた、仲々しゃれた名であろう。二年位前のある日我が家の玄関先に辿りつき、泣いて（？）いるのを抱き上げて見たら目がない。みすみす交通事故を承知で追い出せもせず、可哀そうー、可哀そうーと家に入れてミルクを飲ませた。これがルミエールでまたの名を〃座頭市〃とも云う。蝿（はえ）とりのチャンバラをご想像願いたい。

ついでに申上げると、これら猫チャン達の名前は全べて我がカミさんの発想で、ダンナが考えたのは〃甘香〃なる源氏名だけである。ともあれ、これら猫チャン達の食事づくりや毛の手入れ、ウンチ、オシッコの始末に追われて、我がカミさんは毎日大忙しなのである。



# 柘植重夫先生の勲三等瑞宝章叙勲をお祝いして

斉藤医院　斉　藤　義　寛

昭和三十四年のある日、私は小樽駅頭に柘植重夫先生を迎えた。市立室蘭総合病院の大院長はきっとグリーン車で来るに違いない。と思っていた私の予想は、見事に外れた。悠然と普通車から最後に降りて来た大男。すりきれた大きなカバンを軽々と持ち、これもうす汚れたレンコートに、はき古したどか靴。初対面の私は、それが柘植重夫先生とわかる迄には、大分時間がかかったように思う。

当時私は、市立室蘭総合病院祝津分院に赴任することに決っていた。といっても、祝津分院という病院ができていたわけではなかった。建築する場所だけが決っておりそこにどんなふうに精神病院を建てるかということが、当日の話題であった。

「どこか食って話をするところはないかね」

柘植先生がそう言うので、すし屋の座敷でも案内しようとすると、

「ここでもいいじゃないか。別に秘密の話があるわけでもないのだから。」

と言って、自ら先に立って入って行ったのは、駅前の最も貧弱なそば屋だったような気がする。

私はそこで室蘭市の建築技師と二人で内地の精神病院を見学してくることを具申した。その頃、北海道にはろくな精神病院はなかったが、当時日本で最もお金をかけた精神病棟が、神奈川県立芹香院で完成したこと、茨城県立友部病院が全国のモデル精神病院として建築中であること、最も自然環境に恵まれているのが国立武蔵療養所でそこの関根真一所長が我が国の精神病院建築の権威であることを、私はよく知っていたのである。

「鉄筋コンクリートの建物は五十年以上はもつものですから、少くとも二、三十年後の人で見ても恥づかしくない建物でなければなりません。」

当時まだ三十二才の若僧の私が言ったことは、相当に生意気なことだったように思う。

しかしその後間もなく、私は室蘭市建築指導課の川村建一さんとこの三病院を見学した。そして昭和三十六年の夏、当時としては、全道に全く比較するものがなく、全国でも超一流の精神病院が、祝津の丘に建てられたのである。

昭和三十八年のある日、私は辞表を持って市立病院の院長室にいた。当時室蘭市では、熊谷・高薄両候補の市長選が泥試合となり、熊谷候補が敗れた。そしてこの熊谷陣営の総参謀が、私の父であったのである。

選挙にかかわる怨みつらみほど激しいものはない。対立候補の高薄が市長になったのだから、私が祝津分院にいる限りこの病院の将来は暗い。私はそのように考えていた。しかし柘植先生は、この辞表を決して受付けなかったのである。しかし当時の室蘭市の情勢から考えると、この院長の腰が少しでも抜けてもいたら、反対に私が辞任を迫られたとしても不思議でなかったような気もする。

「私がこの辞表を受理するということは市立病院が市長のいうなりになるということなのだ。医師というものは、政治に媚びていては真の医療は行えない。」

私はこんなことを言われたように思う。そしてその翌年の昭和三十九年、祝津分院は本院に先がけて、当時としては、これも

並はずれた巨費を投じて、第二期工事を完成させた。そして私は父の政敵の高薄市長から正式に分院長の辞令を受取った。（それまでの私の身分は、分院長代理であったような気がする）。

昭和四十七年、柘植先生は満二十年という最長不倒の記録を作って、院長職を辞した。後任は一方井卓四郎副院長であることを、先生は信じて疑わなかった。しかしここに思わぬ誤算があったのである。どうも当時の室蘭市は、札幌医大との間に密約があり、先生の退職を心待ちにしていたようなふしがある。市立室蘭総合病院は、完全に札幌医大の機関病院となり、院長を始めすべての医師は、札幌医大から供給されることになった。そして札医大以外の殆んどすべての医師は、この病院を去った。そしてこれらの医師の再就職に対して先生の払った心労は大変なものであった。

しかし考えてみれば柘植院長在任中は、市立病院の医師の人事に対して、室蘭市当局は全く口をさしはさむことができなかったわけである。そして市立病院というものは、決して政治に媚びたり、特定の学閥に従属したりしないで、室蘭地方の基幹病院としての誇りをもって、地域社会に奉仕する自主性を持つことが最も望ましいというのが、先生の本来の主張であった。そしてこのことを望んでいたのは、室蘭医師会を始め当地方の良識を代表する、すべての人々の希望であった思われるのに、先生が辞任した後には、その政治力を発揮する大人物がいなかったのは残念なことである。このような偉大な人材が室蘭市に現われることは、もうないことなのかも知れない。

現在柘植院長は、小診療所において悠々自適の毎日を送っておられる。そしてここで行われる医療は、その豊富な経験と、偉大な人間性から考えて、理想的なものであるものと思われる。そしてこのような医師がまだ医療に従事しているということは、自由開業制度のある日本の医療の大きな長所であるとつくづく考えるのである。

先生は仙台生まれの仙台育ちと聞くが、現在の先生は根っからの室蘭人以外の何ものでもない。だからいろいろな人に、「君は室蘭生まれか」と聞かれるのだという。そして私達には、この世の中のすべての恩讐を越えた大悟の境地をそこに見るような気がする。それは常に全力をあげて、大きな任務を成しとげてきた人にして、始めて達し得る境地なのかも知れない。

このような大人物に、勲三等端宝章というのは、少しもの足りない気もするが、それを受けても別に驚ろくことも、喜ぶことも、それかといって不満がることもなく、いつもと全く変らない平常心がそこにあるだけである。

ただ先生の崇拝者たちが集まり、種々と叙勲の企画をする様子を面白がってからかいながら眺めておられた温顔は、いつまでも忘れることができない。

先生の今後の健康を心からお祈りしたい

# かなり古いお話（その一）

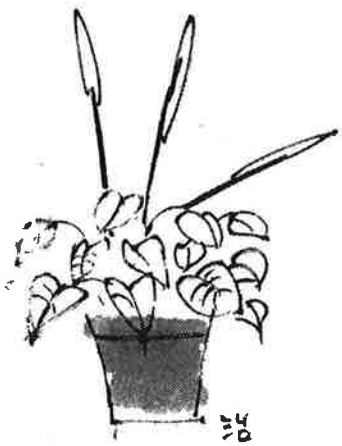
小雲水

室蘭新道も開通し、更に仏坂から海岸を通って夢の白鳥大橋につなぐ新道が実現に近づいている。

戦後今から三十余年前、北海道開発建設局室蘭支部長の猪瀬さん等の夢の構想が人々の情熱と努力でやっと実り、沈滞気味の室蘭に明るい話題を呼んでいる。

私が室蘭の町を始めて知ったのは岡山から転校して間もない当時の札幌の中学校三年生頃の修学旅行、函館から森、森から森室蘭連絡船吹雪丸六〇〇屯のお世話になって夕暮の室蘭の桟橋についた時である。吹雪丸では森側も室蘭側もはしけの御厄介になった。海岸町の本多旅館まではさほど遠くはなかった。腕白揃いの中学生も吹雪丸に乗って間もなく青菜に塩の様になって声もなくなり、あちこちで小間物屋を開いた森を出てから風が強く波が高くなって、早く室蘭に着くのを落日に祈って、四～五時間の船旅を終えた。夕暮れの港の灯は悪童達に再び活力を与えてくれた。翌日は日鋼輪西製鉄を見学、溶鉱炉から流れる熱と光の鉄の流れは驚異であった。当時輪西製鉄は大拡張の途中で埋立てが盛んに行われていて、反対側の遠浅の砂浜は白く美しく、汐干狩で賑わっていて、私達も砂浜から波打際に足を入れて早春の海の冷たかったことを覚えている。五十年以上の昔、未だ大正の末頃の室蘭のほんの「かいま見」である。

その室蘭に戦後御縁があって昭和二十三年夏に札幌から移り住む様になった。蘭西幕西町坂の下附近の古い古い建物に。この古い建物も大正の半ばのもので、港からの寒い風を防ぐ為か、東南側の窓が小さく壁の部分が大きかったので、窓と壁を落して全部ガラスの一枚戸に替えた。お蔭で冬の寒さと風は尚一入であるが、それでも港と茶津の山、室蘭岳までが見通せて気持ちがよかった。室蘭駅を発つ汽車の白い煙と汽笛はその度に見え聞えて仏坂トンネルに消える列車を見送り、いささか郷愁にかられたことである。



海岸町の強制疎開の跡地に、その後次第に丈の高いビルが建ち、旧臼井呉服店のあとにも十階建の大きなビルが出来て眺めは次第に狭くなり、ビル風をまともに受けるようになった。

駅の周辺とその向う側にも船の出入りがあり、入江町から長く海に延びた石炭桟橋では石狩炭田から石炭が運ばれ、三基に増えた大きなトランスポーターの唸りと「オテセ貨車」の往来とは昼も夜も賑やかで、騒音とは感じないで、むしろ蘭西の人々は子守唄と受取り、安心したことであった。真冬には寒風の中でガンガン叩きが闇からはじまる。「オテセ」に凍りついた石炭を蒸気室を通してツルハシで叩く音が凍ってついた空気を高音でひびかせ、ふとんの中で思わず首をすくめ、改めて寒さを感じさせられたりした。

当時、室蘭には私の同期で富士鉄病院内科に伊藤長明君、伊達赤十字病院内科に山田実君が勤務していて、虻田町に田下福造君がいた。後に旭川に移って医師会長を務めた。山田実君は戦後の新制度で初開設の道立室蘭保健所に応援に週二回通って居り「お前も替れ」で私もしばらくお手伝いすることになった。ちなみに保健所は東室蘭駅前を通る国道三十六号線沿いにあり、現労働会館の位置に、その後胆振支庁合同庁舎の現在地に移転した。

小院開設の準備中、宮本先生に連れられて始めて室蘭の医師会の先生方に御挨拶に伺った。

今思へばこれ等の先生方は故人になられた方々も多く、感慨無量である。以下主として物故された先生方や他へ移転された先生方を中心に思い出を綴ってみたい。

斎藤義太郎先生　戦後間もない頃なので旧軍隊の乗馬ズボンも普段着に召され、室蘭市医師会長として先頭に立って居られ、私の様な新参者を激励して下さった。温厚篤実、熟慮断行、物事の判断が適切で、中川先生、松本先生のあとを受け、北海道医師会長、日本医師会理事を歴任され、ロータリークラブ室蘭の会長の時に大黒島にプロビデンス号（寛政八年絵鞆沖に来たイギリス探検船）の記念慰霊碑を建立され、日英親善にも尽され、この他沢山の公要職を兼務されたが過労も続いて逝かれたのは惜しい。茶道、殊に書画骨とうの眼が高く、北海道では始めての日本民芸協会室蘭支部を設立、同好の志を集めて活躍された。他に創成期の札幌シンフォニーオーケストラで第一ヴァイオリンを担当して居られた。（北大には直属の文武会オーケストラがあったが、札幌シンフォニー、オーケストラは大学関係者、教授、学生やO・B等で自由に集ったグループで戦中この二つは合併し北大交響楽団となり今日に及んでいる）

室蘭市立総合病院の阿部新一先生は心も体も偉風堂々の親分肌で如何にも「院長」そのものであった。清濁併せ容れて私共の勝手な論議にも盃をかたむけ乍ら、よく聴いて下さった。戦いがきびしくなった頃、料亭「常盤」が市立病院の分院になり、本院との間の小山を貫いて結ばれていた。戦後、木造の落ち着いた病院が火災をこうむった頃から阿部先生も次第に健康を損なわれたのは残念だ。斎藤先生とも公私共「ウマ」が合っていられた様だ。

柘植重夫先生が次の院長に就任されたがその名は高く、室蘭の街の人望を集めて居られた。「学生の頃、長い大病に罹ったことがある」にしては、柔道六段、旧制二高の頃から文武に秀でて旧インターハイでは松岡先生等の北海道勢の好敵手であった。闘志を秘めて温厚誠実、礼儀正しい人柄で困った時はよく面倒を見て下さった。

松岡幸七先生　長く日鋼室蘭病院長を務められた内田先生のあと戦中、高橋陽夫先生に継いで松岡先生が院長となられた。岩手県一ノ関市の旧家で銘酒「関山」の醸造元は兄君が継がれ、北大第一外科で長く研讃を積まれた。寡黙篤実、質実剛堅、殊に学生の頃からの柔道は六段、前記の様に柘植先生とはこれを通じて肝胆相照した文武両道の士、心身共大きな人柄で絵画、謡曲、尺八の道も深かった。

戦後、荒廃混乱、物資欠乏、人の心も絶望空白からようやく落ち付きかけた頃、新制度に基いた医師会、厚生省、新機構行政各種各様の行く方向もようやく緒についたばかりの頃で役人の往来も多く、講演会も度々開かれ、「新体制への指導」が肩苦しく重く、今でもその当時を思うと身振いがする。こうした中で時々次第に私共本来の「病気や治療」の講演会も開かれる様になったが、学生や教室にいる頃は内すばりの親父の様にこわかった恩師の諸先生が白髪も増えて温顔をほころばせて、わかり易く事を説明して下さるのを聴くとホッとして心もなごんだ。

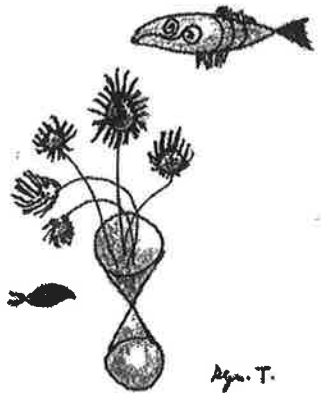
色々の会合のあとには慰労の席が設けら

れた。料亭「常盤」「粋月」、「鯉川」等が主なところで、その宴を盛り上げて貰うのは当時新発足の「三ツ和倶楽部」の美人達であった。（実はこの項は三ツ和倶楽部を主題にするように編集諸先生から指定されたがエピソードが多く、次号に譲りたい）その三ツ和倶楽部の三弦、笛、太鼓と美しい衣裳の本格的な舞踊につづいて更に余興の呼び物は斎藤、柘植、松岡、三偉丈夫の先生によるユーモアあふれるソーラン節は、その折々趣向をこらした鉢巻、ハッピ手甲脚袢、櫂、時には草鞋までの小道具で一同は心の底迄堪能させて貰った。斎藤先生の黒田節の踊りは随分年期の入ったもので時には黒紋付に仙台平の袴に白足袋で見事であった。阿部院長も舞踊が堪能であって、大きな武骨な体がしなやかな線で本格的なものであった。宴では三ツ和倶楽部の美人達のバックアップでもうそろそろと期待していると必ずと言ってもよい位にこのメンバーでソーラン節が出たものだが、斎藤先生は既に逝かれ、松岡先生も長い御病気で次第に恢復され今は水戸市の令息宅で静養中、三ツ和倶楽部も当時五十人位のメンバーの中にも次々と物故したり廃業したり、結婚されたりで後継者も少なくなり、現在は十人前後となって居り、戦前の事はいざ知らず人の世の無情に感慨深いことである。

大久保慶之助先生、斎藤先生と同期で法医学教室の室に名刺が貼ってあったのは私が医学部一年目、はじめて白衣を着けて面映ゆくその室の前の廊下を往き来する様になって以来で「斎藤義太郎」の名前も隣の室に並んでいて、両先生共御名前は昭和六年から知っていたが、お目にかかったのは昭和二十三年夏、私が室蘭に移ってからである。宮本先生に連れられてはじめて当時大町の病院にお伺いした時から初対面とは思えぬ温い親しみで接していただいた。温顔で美髯を貯え、俳句をよくされ、宮本先生と共に「ホトトギス」の仲間であった。町の散歩や測量山の吟行を楽しまれ、時々地球岬や絵鞆の鼻で行き遭い、車にお誘いすると「ゆっくり歩いて楽しんでいるのに邪魔をするな」と叱られた。亡くなられる一、二年前のことで石ころの山道をゆっくり歩んで居られたお姿が今でも忘れられない。十年後輩の私の処へもよくおい出下さって「皮膚泌尿器科の本を見せてくれ、わしは古いからなあ」とおっしゃられた事もあった。今日程のはげしい動きもない戦後の当時新しい立派な頭脳と紙で出来上った新著は未だなかったので、御覧に入れた本に先生の御満足の行く様なものがあったかどうか、今でも気がかりだ。今思うと、当時北大医学部在学中であった令息の事を新参者の私を通して期待を持たれたのかも知れない。医師会では喧々がくがくの議論沸騰の間はじっと耳を傾けていて、最後に斎藤先生への助け舟を発言されてうまく議事がまとまった様だ。

神島辰雄先生　大町の中程の坂を登ると旧室蘭市立病院長田中先生の跡の病院で広々として立派さがあった。神島先生は北大医学部四期で私は第一生理学の実習の頃からお世話になっていた。お年よりはかなり先輩に見える堂々の風格があり二十年近く経ってお目にかかってもあまり変りはなくかえって若々しくお見受けし、大町の主になって居られた。当時は未だ珍しかった一瓢をいただいてびっくりしたこともある。クラシック音楽一般に造詣が深く、昔北大文武会合唱部で鍛えられた美声は邦楽の唄にも窺えて見事であったし、輪西市民会館へ北大交響楽団を招かれる等思い出は尽きない。医師会の親睦団体として、その名を替えた室蘭市医師親交会が発足してからもう久しくなり、会員も次第に増え、遠足旅行料亭での懇親会やゴルフ、囲碁、マージャン等々と親睦を深めて行くが、それに大いに貢献した三ツ和倶楽部の人々との心のつながりや、その盛衰等は次の機会に譲って記して行きたいと思う。

# 旭川旅行記



## バスの中

斉藤修弥

ぬけるような初夏の晴天にめぐまれた今年のバス旅行は、六月十三日午後一時、目的地旭川目指して市役所前を出発しました途中、八カ所の乗車地点を何れも定刻以前に通過し、多数の新人の参加を得た一行三十七名の研修旅行が登別から賑やかに始まりました。

大岩部長の挨拶をまってすぐに例年の如く、ビール、ジュースの車内サービスが始まり、晴天も手伝って仲々の売れゆき、苫小牧に着くころにはゴルフをしない先生方も一様に血色の良い顔色になっていました広く見聞を旨とする旅行の目的から、まず室蘭―大洗航路のライバルとされている苫小牧港の視察を、慎重に案内なしに自主的に行なった私達は、焼鳥つきのワンカップなど新しい治験品目を補給して、第二中継点岩見沢へと向かいました。

車外の田園風景をみなれた頃、三村幹事から最近体力、気力の回復に役立つという有益な国内文献を入手したという発言があり、早速車内でその写真集の一部が回覧されました。会員一同これも研修のためとあらゆる資料に目を通し、角度、姿勢、目的などについて夫々の専門的立場から熱心な質疑、討論および追加発言が続出しました

きわめて学問的な雰囲気の中に岩見沢に着いたのは午後五時をまわっていましたが、駅前で最終乗車予定者西村先生がわざわざ札幌経由で乗りこまれ、車内は一段と活気づきました。

岩見沢を発車するとバスの中は一転して雑談の花が咲き、旭川の夜の社会情勢、あるいは明日のゴルフの馬券の確率などについて秘密会談がもようされ、慎重な先生方は仮眠をとって夜に備える姿があちらこちらで見かけられました。それもつかの間の静けさで、神居古たんを過ぎるころから満を持していたバスガイドさんが活躍しだしました。

自称新人と話していましたが、その名にふさわしく知らないことは知らないという堂々たる態度で、通過地点に関係なく所持したトラの巻を朗読するのがいかにも大陸的、先生方がすっかりPTAになって励ましたり、アドバイスを与えたり、まるでかけあい万才のようなユーモラスな雰囲気に酔っている中に、道南バス「タフネス医師会号」は六時間の長旅を元気に乗りきって夜のとばりの降りたロマンの町旭川、その中で一段と光り輝く東急インの玄関前に午後七時静かに横づけになりました。

# ホテル宴会
## 二次会のこと

事務局　青木　茂

六月二十一日が夏至の筈だから十三日の今頃は屋外行動に一番いいとの目算で旅行会の日程が組まれている相で、なる程六時間ものバス旅行も大して長く感じないままホテル入りとなったのが恰度日の暮れ頃でした。

サア愈々第二ラウンド旭川の夜の番です心なしか同行諸先生の動作が活気づいて来たように思われます。ゴルフ連は七階、他は八階に決まり、持物を置いて一服する暇もあればこそ九階の宴会場へ駆けつけねばなりません。各ルームの入口ではドアキーの確認でガチャ〳〵ガヤ〳〵です。ドアロックが最新式の為、部屋の外から明ける時は何が何でもキーが要るとの事で、最新式とは不便なものだナと思い乍ら宴会場へ。丸卓が五卓。ほぼ全員揃った所で大岩行事委員長が起立。挨拶と思ったら二次会の会費徴収の宣言。とんだご挨拶ってこんな事なのでしょうか。成程こう言うのは早いのに限ります。お互様。

恒例により親交会長挨拶に続き、副会長による第二ラウンドゴングがわりの乾盃。ホステスも四人程居りましてサービスにつきますが、バスの中で多少入った故か、この後の二次会が飲み放題のキャッチフレーズ付きの故かここではあまり捌けません。少し退屈しかかる彼女達を見て、心優しいA先生は一人づつ呼び寄せて源氏名のおさらい。その甲斐あって終宴の時には四人の名を連呼して別れを惜しんでいました。昨年好評だったゴルフ・トトカルチオの入札も始まって馬券ならぬ人券発売の胴元先生の声が雰囲気をとみに盛り上げていきます

今年はダレがドナタにドンナ幸運をもたらすのか、去年の予想的中の例からみても可成りの平常心を要するのでしょうが、買う側としてはアルコールちゃんと道連れの予想見なのだから、これ又、何層倍も楽しいものでしょうし、明日の結果が待ち遠しい次第です、あしたに夢を託した紙片が集められると引続いて玄人演芸大会の開幕。準備OKのカラオケをバックにO・S・M各先生が年季のノドを披露します。宴会の歌番組は一手引受けの前評判高かったS先生の突然の不参で心を痛めていた幹事もまずは安心。更に安心のダメ押しをするようにM先生の日舞。ナント衣装・小道具を持参しての熱演。これも年季の手振り身のこなしはカブリツキのカメラマンのフラッシュを浴びて、後ろの金屏風より更に一段と光ります。斯くして唄に踊りに歓談に過す刻の経つのは早いもので、やがてホステス諸嬢?の時間の切れ目が宴の切れ目となって、T先生の発声で第二ラウンド終了のゴング、兼第三ラウンドのときの声でもありました。

「二次会参加の方は一階ロビーに集合!!」となって、長征の身をベッドでいやすべく引揚げる先生、まだ〳〵宿敵征伐に斗志を燃やす先生とわかれます。ロビーには申し込み数を超える人員が集結してます。入り込みの約束時刻も迫るままに確認はあとまわしにして「出発!!」。軍都旭川の街をAIクラブを目指して夜の進軍です。

ホテル界隈の静けさをあとに五、六丁も歩くと、行交う人と肩を触れる程の雑踏になり、漸く訪れた夏の気配を吸収しようという軽装の若い男女が連れ立って散策しています。その中を進む自称青年の一団はどんな風に見えた事でしょうか。そんな繁華街の真ん中に目指すAIクラブがありました。さすが人口三十万の旭川で一番大きい店とかで、札幌に追いつけ、負けるなの気慨だけはみせる広さはありました。サテ、問題は中味です。ワンボックスに十五人は

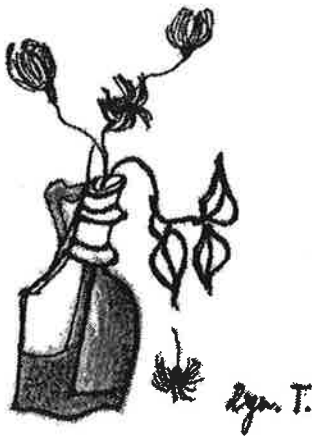
座れそうな広いボックスがステージに向って幾つも並び、ステージもそれに遜色ない位の間口をもっています。ショーが売物なのかせり出しのステージもあって、引込めれば広いダンスホール、舌を出すようにせり出せば各ボックスからの眺めも宜しい仕かけだそうで、セリ出しのメカニズムは今はやりの電動式パチンコ等と同列のものではなく、号令一下ワッセワッセと人力で押し出す式のエレガンスも備えたものとの嘘かマコトかホステスの話。

恰度ショータイムに合わせて入店したので、水割りをオーダーしてひとしきりワイ〳〵やっているうちにショーの開幕です。幹事としては超過人員の確認も済ませたので、これで安心。予約の三割増しの大入り満員でした。ショーはトロンボーンの曲吹き（と言うのでしょうか）のナントカ言うアーチスト氏。セリ出しステージに颯爽と現われた姿が黒のタキシードに身を包み、アゴ髭モミ上げも黒々と長いガッチリタイプの彼、十余人のバンド演奏をバックにキングサイズのトロンボーンを陽気に振りかざして〃聖者が街にやって来た〃の開幕演奏。何やら期待に違わぬダイナミックな臨場感に包まれて、ボックスの先生方の指先はテーブルの上を踊り出し、踵や爪先の躍動が膝小僧をスウィングさせ始めたようでした。ジャズに始まって歌謡曲、民謡にまで演奏は続き、合間に仲々張りのある喉で唄も出るし、漫談も入るで、筆者などはウットリ見入ってしまい、忘我の境。終盤では演奏に熱が入った身振り、宜しく着ているタキシードの袖・前・後とバラバラに破り捨て、最後のアンダーシャツはボックスに向って、チギっては投げ、チギっては投げの熱烈演奏。ソックリ返ってラッパを口に立てての手放し演奏には大入りの客から盛大な拍手が湧き上ります。

ショーが終ってセリ出しが引込むと、ダンスホールに早替り。並みに乗った諸先生は我も我もとホールに出て、敵方を抱えて昔とった杵柄（否、現役かも?）の軽快なステップを踏みます。昨年の札幌の二次会場の雰囲気よりはどうも今年の方が数倍優れているようで、行事委員長も大安堵。

自らも踊りの渦の中に巻き込まれておりました。斯くして刻の過ぎるのも忘れるうちに本日最後のショータイム。折角来たんだからゆっくりしようと許り、又、同じ事をするのかどうかと目を皿の様にして見守ります。こんどは真っ白のタキシード。これは仕かけがないとみえてバラバラにはしないものの「今宵は遠く室蘭、登別方面から多数のお客様がお見えのようで」とか口上があって、当方御一行様の気を引き立ててくれます。終演は手放しで口に立てたラッパに万国旗の掲揚式。これがおしまいとて軍都旭川に馴染みの消灯ラッパを奏する中、日の丸の小旗がラッパの先から静かに降りて幕と言ったフィナーレ。イヤハヤ全く楽しい旭川の二次会の数刻でありました

この感激ぶりに目をつけられて本文の執筆を命ぜられたのは全く不覚の至り。楽しみあれば苦ありで、もうこの辺で放免して戴くことにします。



# 夜の旭川探訪

H・M

室蘭の地を離れ、バスの車中にて六時間の行程を終えて、旭川の逗留先「東急イン」へ着いたのは、夜の帳が訪れ様としている午後六時三十分過ぎであった。人口約三十万人の夜の旭川の地に、室蘭の著名人ばかりが、それぞれに期待したものはなんであったのか。東急インにて小宴会を終えて原田医師会長の縁の地で既に探索されていた二次会集合の場所「クラブ・エーワン」へ、医師会員が総勢繰り出したのは、旭川の街のネオンが一層夜の闇に瞬き出した八時半の頃であった。東急インを出て徒歩にて二十分ばかりで、人通りの多い、いづこも変らぬ都会の飲食街が連なる雑踏の中へ各々会員一同が思い思いの話をしながら歩を運んだ。碁盤の目の様に創り出された通りに面して、大きな飲食店街の集合するビルが、ネオンと共に浮びあがり、その街の様相は「リットルサッポロススキノ」を思わせる愛欲の世界を漂わせるに充分な街並みに、生唾を呑まなかったのは、手記をかくべく冷静にみることの出来る著者を除いてはいなかったものと思われる。

階段を昇りドアを開けると、約一〇〇坪以上のフローが拡がり、テーブルとシートがワンセットになったのが、およそ五十以上、ワンセットには七、八名が坐れると言ったマンモス・クラブであった。総勢女性の数はおよそ百人は下らない、若いピチピチとした肢体をもった女性から肉感よろしく大味な女性から、小股が切れあがった女性から、柳腰を想わせる女性から、事をなして来たあと湯上りした様な女性から、その群は会員一同のそれぞれの坐った左右前へと、微笑みかけたのは、物の数分もたたないうちであった。そうしているうちに、激しい音楽の音と共に、展開されたのはトランペット奏者による音楽ショウであったそれが終えた頃は、それぞれがそれぞれの女性とスキン・シップをし始めていった。酔うほどに女性も会員それぞれも、何かを求め出したのはどこからとも聞える怪しげなトーンの声と、断片的に入る会話の内容の中に、更にチップを払うから踊って欲しいという様な意味の声が聴えて、会員某氏がチップを払い出したという情報が耳に入り出した頃であった。

必ずきまって一人一人の女性の胸には、自分のそれぞれの願いをこめた仮名を胸に着けていたのであったが、更に差し出す名刺の中には、自分の連絡場所の電話番号が銘記されていて、愛欲を求めるのには都合の良いサインがあったと聞いているが、その名刺を手に入れて利用した諸氏はいたでしょうか。

風俗文化史の中に飾る江戸元禄時代の性風俗に匹敵される昭和元禄の性風俗は、それに勝るとも劣らない高い香りを開いている。その中に生きた時代の大衆の心の反映であり、旭川の夜のネオン街にも、トルコ風呂が二つあり、又、ノーパン喫茶もあったこと、まさに平和の世を象徴している。それぞれ体験した某会員の弁によれば、トルコはまあまあであり、壮快なる気分を味合うことが出来たとの弁があり、一方、ノーパン喫茶なるものへ入るなり小用のためトイレへかけこんで出て来たとたん、連れの仲間が立ち去っていて、吃驚仰天、連れの仲間のあとを追い、逃げ出そうとした途端に、そのオーナーと一問答一波瀾あったとの事「これはしまった。しまった。非常にびっくりした。」

との御本人の弁があり、某会員によれば街娼がいて通りがかりに呼びとめられて、昔を偲び嬉しかったとの弁があり、美女のいる所を求めてスナックを何軒もはしご酒をして、夜の巷を彷徨って、何を求めてあるいたのか、まあ〜こんなもんだなとい

う訳のわからぬ弁もあり、短い旭川の夜の一時も、またたく間に過ぎていった。

東急インのホテルのロビーには、それぞれ彷徨い歩いた各々会員が午前一時から二時にかけて、ちらりちらりと顔を合せながら、各々の部屋に消えていった。辿り着いたのが、なんとなくほっとした様な、又、祭りの後の静けさが漂よう様な旭川の夜の一夜であったが、室蘭の地を離れた嬉びがいっぱいに伝わってくる各々会員の顔が、いつまでも忘れられない旭川の夜の探訪の一夜であった。

# ゴルフ優勝の記

西島　毅

医師会入会後、まだ日も浅いので、簡単に自己紹介致します。昭和二十二年三月十七日小樽にて出生。その後、幼年期、思春期は十勝の山深い足寄という小さい町で育ちました。

昭和四十六年札幌医大を無事卒業し、酒につられて、札幌医大産婦人科に入局。その後、全道、東西南北くまなく放浪後、昭和五十三年十一月、当室蘭市立病院に勤務致しました。縁がありまして、昭和五十六年一月一日付をもちまして、高砂産婦人科で共同開業致しました。

妻、二女がおります。今回、医師会の旅行で、ゴルフコンペがあるという事で早速出席させていただきました。前日は旭川到着後、懇親会、その後、キャバレー（？）に二次会へいきましたが、毒気に当てられPM十時頃に早々に退散し、それが好結果になったのではないかと思います。

AM五時三十分起床、眠い目をこすりながらタクシーにて旭川大雪山カントリークラブへ一目散。ゴルフを始めて三年目。まだまだ棒をまともに振れず、ハーフ50の壁を一進一退の状態で、今回もまた駄目だろうと思っていた。

原田先生、大久保先生、森川先生、私とでスタート。三先生に迷惑をかけながら、前半はまったく予想通り、54で終了。がっかりしていたが、我がライバルである野村先生が50という好スコアーを聴き、かなり低調なる争いではあるが、内心ひそかに後半に期待をかけた。そばを食い、ビール小壜一本をあけ、ほろ酔い気分でスタート。その後は我慢〳〵のオンパレード。終了時は何んと47と驚くべき今期始めての好スコアーではないか。トータルで101。ハンディ72なのでネット74。結局、他諸先生方は前日が過ぎたのか（？）不調のため、私に優勝の栄冠が輝き、まことに結構なる優勝景品と優勝賞金ン万円をいただきました。

終了後、和食店小城で、ビール代半額寄贈させていただき、しごく満悦致しまして車中、ビール・酒につかりながら帰蘭致しました。

来年もまたよろしくお願い致します。

# 市内観光

狩野正直

前夜三次会、四次会と飲み廻り午前様にてホテルに帰り泥酔様に眠りこけた私も、しじまを破る朝の騒音に負けて目が醒め、重い頭を押えながら濃いコーヒーとトーストの軽い朝食をすませ、皆様と市内観光に出発。

先づ、車は北邦野草園へ。清流オサラッペのほとり丘一面の静まりかえった林の中を、時々聞えるクマゲラの木を叩く音を楽しみながら、濃い草熱れの中、種々の野草の集落を、又、樹齢も高い色々の樹木を眺めながら三々五々暫し散策。時に道端にひっそりと咲いている黒百合を見つけて喜び又、時々目を楽しませるかの様にエゾリスが私達の前を出没してくれたのも一興でありました。

その後、車は優佳良織工芸館を一見して旭川市内中心街の買物公園へ。日曜日にて晴天室蘭地方では考えられぬ暑さの中、歩行者天国は人々々、すっかりサマースタイルで低温多湿地帯に住む我々には誠に羨しい次第、歩行者天国は旭川市が自慢するだけあってさすがでした。裸のまま照りつける太陽の光を精一杯浴びるかの様な著明な作家の製作せる数々の彫刻。その熱気を弾ね返すかの様な冷気を呼ぶ噴水。いたる所にツツジを始め花々が咲き誇っていて、それを包むかの様に両側にデパート、洒落たブテイック、コーヒーショップが並び、買物だけでなくぶらぶら散歩しながら空間と路上を娯しめる憩い場として申し分ありませんでした。

会員の皆様は夫々その雰囲気を楽しみショッピングをし、コーヒーを味わいながらホテル迄散策。その後、小城で京風の料理を満喫しい錦鯉の群に目を楽しませながら一服の後、三浦綾子作「氷点」の舞台として有名な見本林へ。飽く事なく澄みきった青空を突き刺す様に聳えるストローブ松、ヨーロッパ松の生い繁る林の小径を歩むと今迄身を包んでいた汗ばむ様な熱気を奪う様に冷んやりと頬を過ぎる微風が心地良く蟬時雨の中、時折キイーッキイーッと野鳥の鋭い鳴き声が楽しく耳に伝わり、枝々を飛び交う色々な野鳥の姿が素晴しく、文学的なことはさておき、餌を与え野鳥を集めて楽しみ、色々な小動物を飼った事のある私には、もっと林の奥へ行くとまだまだ素敵な自然の居住者に出会えるのではないかと魅力的でありました。早朝などはさぞ素晴しく狭霧の流れる林の静寂に身をゆだね無心に朝の糧を求め飛び交う野鳥、小動物を眺め楽しめるのではないかなどと思いながら、僅かな一刻を惜しみ、又、一しきりの蟬時雨に送られ、車上の人となり帰路についた次第です。

郭公の声も涼しく樹々を縫い
風に乗りけり森をゆく道
（見本林にて）

噴水の描ける虹を受くる如
巨いなる掌の広ごりて在り
（買物公園の手噴水）

エゾリスの跳び去り消えし草叢に
震えひっそり黒百合の花
（北邦野草園）

# 「優佳良織工芸館」を訪ねて

阿部昭治

今年の旭川行きの親交会旅行の案内を手にした時に、私は即座に欠席に○印を付けた。

理由は至極簡単明瞭で、自衛隊見学が旅行の中心的行事に思えたからである。

私は十数年前に、体験入隊の名目で二泊三日の自衛隊生活の経験もあり、今更この年齢になって自衛隊見学であるまいと考えたからである。

旅行の事など忘れてしまった頃に、大岩先生（大岩観光社長）から電話があり、是非参加せよとの事だったが、前述の理由を申し述べ御断わりした処、スケジュールを変更し、優佳良織工芸館を含めて新しいプランを立て直すからとの同社長の有難い御配慮を載いて欣然として参加に踏み切ったと言う次第である。

実は、愚妻が曾ってこの工芸館を訪れた事があり、「グループ旅行のため、充分の見学時間はなかったが、一見の価値のある処だ」と私に話して残念がって居たのを想い出したからだ。

今年は冷夏続きであったが、旅行当日は珍らしく晴れ上り、幹事諸先生の努力の結果、終始一貫楽しい旅行だったが、私にとって最も印象的且つ有意義だったのは工芸館見学であった。

ユーカラ織に対して、その名称から考えて緬羊の毛糸を使って、単にアッシ織をモディファイしたものか、戦前の岩手産や道産品の粗雑なホームスパンをレファインしたものであろうと言う認識しか持ち合せていなかった。

工芸館の建築もテレビで紹介されては居たものの、斜陽室蘭とは違って、流石に旭川だ、美しいものだと感じて居た位であった。

車窓から眺める小高い丘の上に建つ瀟洒な建物は、白壁が新緑に映え、会長をリーダーとする前夜祭のパーティーとは全く異質の力と誘惑を覚えつつバスは工芸館へと走り続けた。

到着を待ち切れなかった童の様に、小走り乍ら玄関ホールへ飛び込んだ。

ガイドの紋切型の説明とは全く異なり、先づ私の度胆を抜いたものは、広々としたホールのど真ん中に鎮座して居たブロンズの裸婦像である。これは一見して佐藤忠良の作と解ったからである。

忠良の作品は、長年の垂涎の的の一つではあるが、私にとって〃高嶺の花〃〃高値の像〃である。

彼は、旭川出身の彫塑家で、現代斯界の泰斗であり、札幌大通り公園の「母子像」の作者と言えば御解り戴けると思う。

今次大戦中、ソ満国境で交戦寸前に、「死にたくない。パリ迄歩いて行って彫刻をして見たいと考えて、敢て逃亡兵となった」と言うエピソードの持主でもある。

大岩社長が受付で、木内綾女史と連絡中に同女史著の「手のぬくもり」を見付けたので、早速購入した。私は受付附近に立ち乍ら期待と驚嘆の眼差しで周囲を眺め回して居たが、不図振り返えると、そこにも忠良の作品があるではないか。これは彼の「帽子シリーズ」として有名な作品群の中の一作である。

目のあたりと言うよりも、手で触れ得る処に陳列されて居る。このブロンズ像のプロポーションの良さに魅了されて暫らく不動のまま凝視して居た。

やがて木内女史が見えられて、大岩社長

一行は彼女の案内で展示室内に誘われた。
道産材のみを主体として例えばニレ・オンコ・ミズナラ等で夫々一室づつを統一して備えた展示室に、ゆったりと同女史の優佳良織の作品が陳列展示されていた。
私は前述した優佳良織に対する偏見誤解は瞬時にして霧散してしまった。
私が今迄見たこの紬は、千才空港の売店等で一瞥したに過ぎなかった袋物・ネクタイ等の小物の作品許りで、これらに対する先入観も手伝っていた為もあろうが、世俗的の土産品の類と勘違いしたのも無理からぬものと自己弁護したいと同時に木内綾女史に心から陳謝したいと思う。
彼女の作品は、摩周湖、ライラック、流氷等の北海道をテーマにして織られたものであり、これらの風景を知って居る私共が各テーマをイマジネートし乍ら観賞する時に始めて作品の美しさに打たれるものである。
私は先程の弁護の理由の一つに、もう一つ付け加えたい。
私の曾って見た小品は、作品の一部をカットして作られたものであるためであると
私はこの展示室内の優佳良織は、Als Ganzes で拝見出来たからである。どんな名画でも、テーマ部分だけを切り抜いては全体の雰囲気は失われてしまうであろう。
紬の一作を全体として観賞する時にのみ、その構成、色調、気品、経緯両糸の醸し出す幽玄とも言える表現を感じ取ることが出来るのではないか。
私は民芸の定義はさて措き、これは民芸品ではなく芸術品であると断じた。さればこそハンガリーの国際展で金賞を得たのである。
民芸の域を脱し切れないものが、金賞を獲得する筈はないのである。
この様な色調や構図、北海道を織ると言う木内綾女史の作品を、文字をもって表現すること自体所詮不可能なことである。それは例え文豪と雖も。
これ以上のものは、詩情、感性と言った様な眼鏡をかけて作品に接し、始めて理解出来るもので、工芸館を訪れて御覧なさいと申すより方法はない。同館の立派な大きなパンフレットを購入されても、その片鱗を窺うことしか出来ないと忠告して、私の優佳良織に対する説明の責任を免がれたい
木内女史の案内により一応展示室を出て玄関大ホールに戻り、このホールに就いての説明をうけた。最初に私の心を奪った忠良の二像の外に、中庭にも、更にシャンデリア、玄関扉のレリーフ、引手、ガラス窓グリル、又、当館のシンボルマークに到る迄、忠良の作品であると教えられて、再び驚嘆と羨望した。
入場する時は急ぎすぎて、玄関扉のことなど全く気にも止めずに飛び込んでしまったからであろう。
ここで同女史と共に記念撮影をし、彼女の説明は一通り終って別れた。
私は彼女の物静かな態度、飾らざる直向きな美と真を求める心、誠意と自信に満ちた中にも謙虚な振舞いと、彼女の無表情とも言える顔付の中には尼僧の様な美しさを感じ、芸術家としての外に彼女の何処にこの様な事業家肌的要素があるのだろうかと呻吟しつつ、一芸に通ずるものは……の感を深くし、大変御迷惑な事ではあろうが、尊敬すべき長年の知己を得た様な想いであった。
私は最近、自ら「一旅行一点主義」と称して、何が記念になるもの、生涯の想い出になるものを、それが私にとって少々高価なものであっても、一品だけを物色して帰る様に心掛けている。
館内の売店に立ち寄って見た。
元老東先生は、民芸、盆栽等多趣味な方で、女性にも持て、愛酒家である事は周知の事実である。
期せずして、この元老と同じ場所に立ち止って居た。他の売場を全部見つくした訳ではないが、空港売店と類似したものが多

く、足を止める気にならなかった為であろう。

私は元老と御揃いのブレーザを注文し、出来上ったらこれを着て室蘭の紅燈の巷を一諸に飲み歩こうと余りよからぬ相談をし乍ら寸法を採ってもらっている間に、私は共地で紳士用バックを作りたいと思い付き注文した処、鞄類はもう東京のメーカーが注文に応じて呉れないので、在庫品の中から択らぶ様にとの事で、失望し半ば諦めていた。

全く尼僧の如くに静かにと言う表現しか出来ない様に、何時来られたか気付かなかったが、綾女史が傍に立って居た。私は例のバックの件を話した処、「何とか致します」との御返事を載いた。私は実に嬉しかった。

これも彼女の人格の一端を示しているものと思う。

東元老と私だけがバスの時刻に遅れたらしく、「早く来い」との伝言が来た。後髪を引かれる様な想いでバスの中の人となった。

この様な想いは優佳良織にか、ブロンズにか、又尼僧に対してかは解らない。恐らくすべてであろう。

私の心中では、木内綾女史は、女史でもなく、先生でもなく単なる「綾さん」に変わって居た。申し訳けない事であるが、僅かな時間の間に、この工芸館に包括されるすべてのものに対しての認識が変化してしまった事を感ぜざるを得なかった。

仮縫いの時には、妻と共に再び出かけて行き、ゆっくりと見学観賞し、綾さんとの再会を楽しみにしている。

この工芸館を後にして、芸術は芸術を呼ぶものであることを痛感した。

綾さんの芸術は、佐藤忠良のそれを呼び工芸館の設計者や建築家の共感を呼び、恐らく直接手を下した職人達もその意気に感じて仕事を続けたことであろう。

芸術するひたむきな綾さんの汗は、多くの協力者の汗と混然融和し、これの結晶が今日見る工芸館の姿である。

最後に「百聞一見に如かず」と言い続け乍ら、綾さんの益々の御精進、御発展と御健康を期待して擱筆する。

# 和風庭園「小城」

高島信治

優佳良工芸館、北方野草園を見学し、有名な旭川の平和通り買物公園を個々に散策した後、一応東急インに戻って再び車中に集合、昼食場の小城（こしろ）に向かった忠別川を渡って旭川駅裏の川の堤の近くに（神楽一条八丁目）バスが止まった。昨年九月に新築された和食庭園である。

瓦塀でめぐらされた白木の門構えが目を惹き、覗きの松がそれに調和している豪華な建物に驚かされた。門をくぐり玄関までの寄りつきは、小粒の砂利で敷きつめられ正面には人工の庭園があり、周囲に緑の樹木をめぐらし中心に大きな池を配し、石橋を渡ると色とりどりの鯉が群って泳いで涼しさを誘う。その奥に銘石で築造された小さな滝があり池に注いでいる。玄関を入ると廊下に当る部分が石畳となり、左右は竹林を模し、小川が流れている。両側に日本座敷が大小十いくつか散在し所詮屋内庭園をなしている。味を楽しませて呉れる料亭は多いが、ここは雰囲気が独得で当地ではとてもお目にかかれないだろう。

全員座敷でビールをかたむけつつ、京風弁当をいただき、食後庭に出て池の辺で記念撮影をして帰蘭の途についた。

尚、参考迄に当日のメニューの内容を御紹介する。

松花堂弁当（一人前三千円也）

一、煮物
　玉子、蒲酢、山菜湯葉巻、小茄子、竹の子、豚角煮、京ぶき、桜ふ
一、焼物
　鰆西京漬、はじかみ
一、揚物
　かに甲羅あげ、レモン
一、刺身
　ハマチ、平目、マグロ
一、吸物
　巻ふ、小メロン、柚子
一、果物
　西瓜
一、グリンピース御飯
一、茶わんむし

以上の様な献立でしたが、私の様な不粋な者には、あの料理の味は解らなかった。参加された諸先生はいかがでしたか。

## 言いたい放題

飯島三男

三十年前に此の親交会を苦労して創設された諸先輩に対し、絶大なる感謝の意を表して来年の栄ある三十周年記念に参加出来る身のよろこびを噛みしめているものです。（多分参加出来ると本人は思っている）

この三十年の経過中の一時期に、余り評判がよくなく、ブツブツ言う声もあったりしたことがあったが、最近は総会にしても、旅行会にしても出席率がよく大変よいことだと思っています。

ところで、設立当初こそ現在の年金制度とかの社会保障も充分でなく、大いにその意義がありましたが、今はいろいろ各種の制度もありましたが、今はいろいろ各種の制度もありますので、余りこの積立金に頼る必要もなくなった様なので、生きているうちに本人がどんどん遊びに使って楽しんだ方がよいのではないでしょうか。弔慰金として貰っては遺族の方達に余分な税金もかかります。

若い金銭感覚にもすぐれた有能な諸氏に運営をまかせると、基金の目減りも少なく有効に使用出来ると思います。値打ちのあるうちに金は使う方がよいのでは。

先日、旭川のバス旅行の時に「死んでから貰っても仕様ないから、来年の三十周年記念には台湾旅行に行こう」と言う御意見があり多数の賛同の声があがりました。私も大いに賛成です。

親交会は親睦団体としてうんと遊び、門戸を広げて、勤務医の先生方にも喜んで加入して頂ける会にしたいものです。

# 「帰りのバスで」

畠山正照

斉藤修弥先生が急用で、前日帰られたため、帰りのバスの中のホストを、私と三村先生がすることになりました。

まず、前日の旭川の夜の街の報告会。ホテルを出たのが遅いせいもあり、さしたる報告もなかったのですが、ノーパン喫茶でトイレを借り小便をしてきただけの先生があり大笑い。

次に、ゴルフの成績発表、西島先生が優勝し賞金数万円を受けとりました。また、優勝、準優勝者の連勝複式投票券の的中者発表、吉井・深瀬両先生の二人しかおらず各々数万円の配当を得ました。

そうこうする間、滝川の休憩所に到着、まだこれから長い道のり車中何をしようかな、と考えておりますと、日本旅行の布目君が二・三ゲームを用意してありまして、それをお願いすることにしました。

まず前日の旭川までのバスの走行距離当て二百六拾数キロメートルとのことでしたが、一番近かった先生が賞品の時計をもらいました。

その他、岩見沢到着の時刻当て、一定時間内の対行車両数当て、ガイドの年令当て（二十才誰も当たらず）等をしている間に、いつの間にか室蘭に着いたわけですが、それらのゲームのなかで川柳合わせというのがあり、これは、上・中・下の句のいわゆる五・七・五を別々に募集して、てんを切って合わせ、一句を作るわけですが、意味の通じないものばかりでてきたなかで、一席になった句を紹介します。「もうだめだノーパン喫茶で玉の汗」今回は、車中いねむりをする人もほとんどなく、退屈しのぎになったようで、私達ホストは、ホッと一息、「さあ、中島町へ寄ろうか?」という次第でありました。

# 編集後記

創刊号が刷上り配布を終えたのが、つい此間の筈だったのに、上田先生から編集会議の召集でした。月日の足どりは速いものです。

先日、会員外のさる人にお見せしたら「……懐旧談が多いですね」

これは、当然のことでして、今日迄の空白の頁を埋めるためにも大いに昔語りをして頂きたいのです。

広告無しのスッキリしたものに……は実現しました。せめて、本文五十頁がほしい鴨長明とバッカス。モリエールと孔子、孟子。ブラームスと八代亜紀が肩をたたきあいながら談笑している――硬軟とりまぜのそんな広場にしたいものです

匿名、筆名について

「裸足になった女房」は実名で差支えないとのことでしたが、楽しい話との映りを考えてM・O生としました。鶯別立体交叉の近くにお住まいです。

「かなり古いおはなし」の小雲水先生はお気付きの方も多いと思いますが、英訳しますと、ノース・フィールドでしょうか。

（その二）が期待されます。

「夜の旭川探訪」のH・M氏は――よろしく御想像ください。

（加藤記）

親交会会誌　波久鳥

発行日　昭和五十六年十月一日
発行所　室蘭市医師親交会
印刷所　室蘭印刷株式会社

| 頁 | 箇　　所 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 目次 | 下段後から6行目 | 村井玄乙 | 村井玄乙 |
| 5 | 上段6行目 | 6年間 | 26年間 |
| 5 | 下段10行目 | 昭和8年ごろ、すすめられて入ることになったが | (以下と重複のため抹消) |
| 7 | 〃　10行目 | 元室蘭医師副会長 | 元室蘭市医師会副会長 |
| 12 | 上段4首目ルビ<br>〃　5首目ルビ | 要塞(ちい)<br>実物の如(さと) | 要塞(さい)<br>実物の如(ごと) |
| 17 | 中段2行目 | 日本上 | 日本人 |
| 〃 | 下段12行目 | 土地土地の診味 | 土地土地の珍味 |
| 20 | 〃　4～5行目 | 遠出が催れ | 遠出が催され |
| 〃 | 中段6～5行目 | 特統天皇 | 持統天皇 |
| 22 | 〃　11行目 | 列車を作っている | 列車を待っている |
| 〃 | 下段3～4行目 | 許月 | 毎月 |
| 23 | 上段16～17行目 | 「大江戸の迷児」のいうのを | 「大江戸の迷児」というのを |
| 〃 | 下段12行目 | 即応すずく | 即応すべく |
| 24 | 上段5行目 | 診療報酬｜私はこう考える | 診療報酬　私はこう考える |
| 〃 | 〃　6行目 | マスコミにも中さず | マスコミにも申さず |
| 26 | 中段後から6行目 | 人で見ても | 人が見ても |
| 29 | 下段9行目 | 質実剛堅 | 質実剛健 |
| 33 | 中段13行目 | 並み | 興 |
| 34 | 〃　3行目 | フロー | フロアー |
| 〃 | 〃　後から12行目 | それそれ | それぞれ |
| 〃 | 下段2行目 | 銘記 | 明記 |
| 35 | 上段後から4行目 | 嬉び | 喜び |
| 〃 | 下段15行目 | 72 | 27 |
| 36 | 上段12行目 | 草熱れ | 草むれ |
| 〃 | 中段14行目 | 満喫しい | 満喫し |
| 38 | 下段後から11行目 | 何が記念に | 何か記念に |
| 40 | 上段後から4行目 | 所詮 | 所謂 |
| 〃 | 下段15～16行目 | 今はいろいろ各種の制度もありましたが、 | (以下と重複のため抹消) |
| 41 | 中段2行目 | 対行車両 | 対向車両 |